327
826

序に代へて

一本書は放資者、思惑者の參考資料に供すると云ふのが其の目的である。

一著者は最近まで過去凡そ十年間、操觚界に祿を食んだもので。最近の數年間は時事新報の一記者であつた。此の間著者は自己の物好きからよく株式市場へ出入したものであるが、時事新報記者としての著者の職分は主として政治方面にあつて、從つて本書の材料は時事新報記者として得たる智識に據つたものではない。

一著者は又、時事新報に入るの前年より同郷の先輩小林敏信氏

5. 4. 27
内交

の經營せる東京商業興信所に一種の關係を有し、或る時は其の客員となり、或る時は理事として同所の事務に鞅掌し、現に今尚客員たるの關係を有するが爲めに、株式市場の裏面や乃至は會社の内幕を知るには特殊の便宜を有して居つた。卽ち本書は主として同所に於て得たる知識を土臺として編纂されたものである。

一本書は東西株式市場に於て賣買せらるゝ建株の全部を網羅して、其の事業の性質、發達の徑路、財政の狀態等を簡單に述べたものである。著者の希望から云へばモ少し詳細に亘りたいのであるが、百數十種の建株全部に亘つて詳細なる解剖批評を試むるが如きは望んで得難き事であつて、本書に於ては止むなく其の概要を摘んで之れを記述したに過ぎない。故に其の道の專門家よりすれば勿論物足らぬ感もあるであらうが、一般思惑者放資者に取つては聊か益する所があらうかと自負して居る。

大正五年四月

編者識

目次

東京株引取引所……一
日本郵船株式會社……七
東洋汽船株式會社……九
大阪商船株式會社……一〇
東京瓦斯株式會社……一一
東京電燈株式會社……一三
日本電燈株式會社……一五
富士瓦斯紡績株式會社……一五
鐘淵紡績株式會社……一七
日清紡績株式會社……一九
東洋紡績株式會社……二〇
尼崎紡績株式會社……二一

大日本製糖株式會社……二二
鹽水港製糖拓殖株式會社……二四
臺灣製糖株式會社……二五
東洋製糖株式會社……二七
新高製糖株式會社……二八
臺北製糖株式會社……三〇
帝國製糖株式會社……三一
南日本製糖株式會社……三二
明治製糖株式會社……三三
沖臺拓殖製糖株式會社……三四
臺南製糖株式會社……三五
寶田石油株式會社……三六
日本石油株式會社……三七
横濱取引所……三九

東京米穀商品取引所……四〇
大阪堂島米穀取引所……四二
大阪株式取引所……四三
名古屋株式取引所……四四
南滿洲鐵道株式會社……四五
東武鐵道株式會社……四七
成田鐵道株式會社……四八
横濱鐵道株式會社……四九
南海鐵道株式會社……四九
博多灣鐵道株式會社……五〇
常總鐵道株式會社……五〇
川越鐵道株式會社……五一
東上鐵道株式會社……五一
小倉鐵道株式會社……五二

京濱電氣鐵道株式會社……五三
阪神電氣鐵道株式會社……五四
横濱電氣鐵道株式會社……五五
京阪電氣鐵道株式會社……五六
箕面有馬電氣軌道株式會社……五六
成宗電氣軌道株式會社……五七
小田原電氣鐵道株式會社……五八
玉川電氣鐵道株式會社……五九
京都電氣鐵道株式會社……五九
武藏電氣鐵道株式會社……六〇
名古屋電氣鐵道株式會社……六〇
伊那電車軌道株式會社……六一
王子電氣軌道株式會社……六一
富士身延鐵道株式會社……六二

京成電氣軌道株式會社……六三
東京灣汽船株式會社……六四
東京石川島造船所……六四
內國通運株式會社……六五
利根運河株式會社……六五
横濱船渠株式會社……六六
新潟鐵工所……六六
横濱正金銀行……六七
日本興業銀行……六八
東京信託株式會社……六九
横濱火災海上運送信用保險株式會社……七〇
東京火災保險株式會社……七〇
共同火災保險株式會社……七一
北海道炭鑛汽船株式會社……七二

九州炭鑛汽船株式會社……七四
石狩石炭株式會社……七五
入山採炭株式會社……七六
横濱倉庫株式會社……七六
大東鑛業株式會社……七七
東京建物株式會社……七八
東洋拓殖株式會社……七九
京城瓦斯電氣株式會社……八〇
北海道瓦斯株式會社……八〇
廣島瓦斯株式會社……八一
横濱電氣株式會社……八二
神戸電氣株式會社……八三
朝鮮瓦斯電氣株式會社……八三
函館水力電氣株式會社……八四

帝國電燈株式會社……八五
宇治川電氣株式會社……八六
名古屋電燈株式會社……八七
東京電氣株式會社……八八
利根發電株式會社……八九
鬼怒川水力電氣株式會社……九〇
猪苗代水力電氣株式會社……九一
桂川電力株式會社……九二
日英水電株式會社……九三
富士水力電氣株式會社……九四
九州水力電氣株式會社……九四
東京瓦斯電氣工業株式會社……九五
名古屋瓦斯株式會社……九五
日本活動寫眞株式會社……九六

富士製紙株式會社……九七
王子製紙株式會社……九八
東京板紙株式會社……一〇〇
帝國製麻株式會社……一〇一
日本製麻株式會社……一〇二
東京製綱株式會社……一〇四
日本皮革株式會社……一〇五
日本鋼管株式會社……一〇六
東京製絨株式會社……一〇七
東洋毛織株式會社……一〇九
上毛モスリン株式會社……一一〇
東京モスリン紡織株式會社……一一一
東京毛織物株式會社……一一二
東洋モスリン株式會社……一一三

東京キヤリコ製織株式會社……一一四
大日本麥酒株式會社……一一五
帝國麥酒株式會社……一一七
麒麟麥酒株式會社……一一七
加富登麥酒株式會社……一一八
東洋捕鯨株式會社……一一九
日本製粉株式會社……一二〇
日清製粉株式會社……一二一
東京精米株式會社……一二二
大日本人造肥料株式會社……一二三
日本窒素肥料株式會社……一二四
日本ペイント製造株式會社……一二五
日本化學工業株式會社……一二六
品川白煉瓦株式會社……一二八

目次

日本セメント株式會社……一二九
日本銀行……一三〇

投機資料

會社の内幕

大正五年三月調

株式會社東京株式取引所

一　金儲けの近道

成金の聲名を恣まゝにせんと欲するものは東株を買へとは株式市場の箴言である。蛟龍雲を呼べば復た池中のものではない。卑賤より身を起して忽ちにして金殿玉楼に座するも亦易々たるのみ。あゝ雲の徂徠を敎ふるものは夫れ東株なる哉。とは市場に出入する人達の日々に夜々に繰り返しつゝある所である。斯くの如くにして鈴久の末路を憐れむ人も、一度兜町に足を踏み入れては其の人の末路を忘れて、唯だ其の人の全盛時代を幻影に描き、其の手は金儲けの爲めにと振られ、其の足は黄金の島へと向ひ、其の耳は功名富貴に敏く、其の眼は

幸運の神を見出さんと輝く。而して是等の群衆の等しく目指す所のものは唯だ夫れ東株である。黒人も東株を謳歌し、素人も亦東株を讃美する。ソモ斯くの如きの人氣を一身に集めつゝある東株の本體は何か？

二　東株八百圓の回顧

赤穂の義士に山と川との合言葉があれば、株式市場には東株八百圓なる合言葉がある。此の合言葉が何時の頃から市場の流行となつたであらうかと、其の起源を尋ぬる迄もなく、其れは東株が始めて八百圓てふ賽の目を振り出したのは日清戰爭の後からであつた。以來東株の八百圓なる合言葉は深く人心に刻み込まれたのであるが、神ならぬ身のマサカに再び斯樣な高値が出やうとは、誰れ一人期待することが出來なかつたのである。所が其後僅かに十年にして東株八百圓買の氣配が現はれたのであるから、市場が驚異の眼を見張つたのも無理ではない。歴史は確かに繰り返したのであつた。而かも第二回目の新高値七百八十圓から、更に又タゞの九十圓に暴落したるの事實は、市場に取つては如何に甚だしき衝動であつたであらう乎。定期市場に賣買さるゝ諸株の内で、東株が一番値動きが甚だしい位の事は、小僧さんでも先刻御承知であるに相違ないので、之れは市場の景氣如何に依つて收入の變化が甚だしいのと、延いては人氣の消長常ならぬが爲めではあるが、七百八十圓から唯だの九十圓まで棒下げにコケて行くなどは誠に喫驚に價する。八百圓買を振つた其の同じ手が九十圓ヤリを振るなどは何と云ふ甚しい變動であらう。其の手をして若し靈あらしめば、彼は其の節を變ずるの甚しきに泣いたであらう。而して今日の二百三十圓は四十一年の九十圓に比較する時は實に百四十圓高で、明治四十三年の高値二百四十六圓と顏合せをした次第である。若しも歴史の繰り返すものたる其の法則にして變更せられず、而して東株八百圓の既往二十年間に二回迄も繰り返されたる事實の取消されざる以上は、東株八百圓を夢みる人があつたとて、必ずしも之れを痴人の夢として擊退する譯にもならない。

三　兜町市場の膨脹

偖、と斯う改まつて說くまでもなく、明治十一年の取引所創業當時の出來高が、七ケ月間を通じて僅かに二百五十三株で、公債が二千六百萬圓に過ぎなかつた

事實は知る人ぞ知る。更に最近に至つて日露戰爭前後の狀況に見ても、明治三十七年までは其の出來高が一ケ年僅かに三百萬株に過ぎなかつたのであるのに、夫れが三十八年には二倍の六百六十五萬八千九百十株となり、三十九年には千二百八十三萬千百五十株となり、爾來九百萬から千二百萬臺を往來して居たのであるが、大正四年下半期には一日の出來高が實に七萬株平均とあつて、三十九年の夫れに比しては約倍額と伸し、更に大正五年の上半期には激增して一日平均十二三萬株てふ豫想であるから、其の發展の目覺しき誠に隔世の感とやらがある譯であらう。既に此の如き賣買高のレコードが出來て見ると、配當二割四五分は動かぬ所で、或は三割の期待も聊か無理ではないと主張される。而して假りに二割五分の配當が出來るとすれば、舊株が三百圓は當然來る可きの運命で、更に新株拂ひ込、增資決行など云ふ噂を孕むに於ては、或は四百圓もあるであらう、五百圓も空想ではあるまいてふ事になつて、其處に買思惑の興味津々たるものがあるのである。

四　戰爭の終局と東株

然らば歐洲戰爭終局後に於ける兜町市場は果して奈何。之れは戰爭が何時終熄するかゝ豫測されぬ以上、戰後の兜町市場も亦的確なる豫想を許さぬ譯であるが、先づ此の問題を確かめる爲めに日清日露共戰役の當時を回想するの必要があるであらう。依つて試みに明治二十八年の成績を檢するに、同年下半期の東株配當は一割八分であつて。其の次期卽ち二十九年の上半期は二割五分であつた。之れは東株配當の新レコードであるのに、而かも三十萬圓が六十萬圓に倍加した同年の下半期にも、將た又翌三十年の上半期にも、依然として二割五分配當を繼續し得たのは驚く可きの事實として傳へられたのである。所が此の驚異す可き事實は日露戰爭後に再び繰り返されて、資本金百二十五萬圓時代の最終たる三十九年の上半期には三割五分配當の新なるレコードを作り、同年下半期には資本金は四百萬圓となりて配當は實に五割に伸したのであつた。而して翌四十年の上半期が四割に減じ、同年下半期より更に著しく配當の減じたるは、資本金が更に千二百萬圓に增加した結果であつて敢て怪しとするに足らない。之れを要するに、日露の戰役は日清戰爭に比して其の舞臺の大きく、其の

輪廓のヨリ大なりし丈け、市場も亦其の色彩をヨリ豐かならしめた譯であるが、然らば今回の歐洲戰後に來る可き株式市場は果して怎うであらう乎。今回の歐洲戰爭は其の輪廓の大なる點に於て、勿論彼の日露戰爭の比ではない。但し、今回の戰亂は我が邦に取つては日清日露の兩戰役と甚しく事情を異にするものがあつて、戰後に到つても勿論償金の入るアテがある譯でもなければ、外債が入る譯でもないが、兎に角に戰爭其ものが大仕掛けである上に、吾が帝國は一面には交際國として立ちながら、他の一面に於ては卽ち路傍の見物人であつて、戰爭が長引けば長引く程、經濟上には大なる利益を受けるので、歐洲戰爭其ものゝ終局が豫測されぬと同樣、我が帝國の享くる利益も亦殆んど測り知ることが出來ない。さすれば此の機會に於て我が株式市場が日清日露兩戰役後と同樣の大相場を繰り返すことがないとは斷言出來ないので、此の洋々たる大勢に立脚して觀測する時は、二回や三回の暴落の如きは大洋上の渺たる一波紋たるに過ぎない。斯くの如くにして日清戰後に鐵道株を增し、日露戰後に瓦斯、電氣、砂糖、紡績の諸株を增したる株式市場は、歐洲戰後に抑も如何なる種類の株を增さんとしつゝあるのであらう乎。あゝ株式數量の增加、次で來る所の市場の殷盛、兜町の大雜踏、其を期待することの決して夢幻の類でないてふ事は、以上の事實より之れを推斷するの可能であるを信ぜねばならぬ。而して其の時こそは卽ち我が東株の黃金時代ではない乎。

日本郵船株式會社

今の市價は五十圓拂込が二百圓と云ふ素晴らしい景氣で、甚麼に不況の時代であつても百圓を下つたことのない程の結構な株である、其れも道理と頷かるゝは積立金の多いことで、驚く勿れ其の額は三千百六十六萬七千圓、加ふるに後期繰越が九十四萬六千圓とあつて、之れを合する時は拂込資本金の約二倍となる。設立は明治十八年の九月で、元の共同運輸會社と郵便汽船三菱會社との合同で成立した會社である。當時の資本金は一千百萬圓で、政府は十五ヶ年間八朱の利益補給を約し、後二十年に至つて年額八十八萬圓下附の特典を許したので、見る〳〵內に社運は隆々、順風に帆をあげる勢ひの所へ、日清戰後には政

府から歐米濠の三大航路開始を命ぜられ、莫大なる補助金の交附を約されたので、之れ丈けでも立派に配當も出來、其の上剩餘金が金庫に唸る始末に、資本金を倍加するやら又は新造船を購入するやら、其他種々なる擴張施設を爲し、利益を多からざるが如くに裝ふやうに努めたが、隱して顯はれざるはなく、何時しか政界の問題となつて、日露戰役後には政府も遂に補助金減額の方針を取つたので、多少不利益な地位に置かれたが、デモ其の時には社の礎は既に固く、積立金丈けでも拂込資本の倍額に達して居たので、資本金を倍加して四千四百萬圓となし、更に積立金の中から千八百九十萬圓を割いて、內五百五十萬圓を新株四十四萬株の第一回拂込に充て、更に舊一株に對して現金六圓二十五錢を分配し、他は船舶の償却やら使用人の慰勞金やらに充て、之れで會社も一段落となり設立以來の總勘定をすませて、第二期の活動に入つたのであるが、持つてるものは尙ほ與へらるゝの譬の如く、歐洲動亂の勃發以來、我が海運界の大活躍となりて、同社の如きも昨年九月の決算に於ける純益は五百三十四萬圓に上り、前期若しくは前年の同期に比して、倍以上の好成績であつたが爲めに、慣例配當の外に五分の特別增配を敢てした譯である。現時の資本金は前述の如く四千四百萬圓で、內拂込が二千七百五十萬圓、舊株四十四萬株が額面五十圓の全額拂込で、新株四十四萬株が十二圓五十錢の拂込である。斯くも澤山の株數であるのに、兎角浮動株が手薄で、實株の賣物は何時も見當らぬと云ふ狀態は景氣が可い。

東洋汽船株式會社

氣息奄々、今にも息を引き取りさうに見えた東洋汽船が、歐洲動亂てふ注射一本で忽ちに復活して、目覺しい活動を演じやうとは、世には案外な事が多いものだ。五十圓拂込の市價が一時は十何圓で、而も君子は危ふきに近よらずなどと嘲られて、誰れ一人手出しするものもなかつた此の株が、九十圓近くまで伸して居るなどは全く夢のやうな話であつて、現に昨年の春あたりは郵船との併合談を始めて、手もなく拒絕された程であつた。然るに歐洲の動亂から海運界の活躍となり、此の社の如きも永年の悲境から脫却し、郵船や大阪商船と共に

世界の航路に活躍して遂に未曾有の好成績を收め、舊株七分、優先株一割二分の好配當を決行し、更に此の機會を利用して十二分の成果を收め、社債借入償却を行ひ、大いに社礎を鞏固にすると云ふが、果して豫定の如くうまく行くか怎うかは疑問としても、此の前途には多大の興味が伴ふに至つた譯である。設立は明治二十九年の七月で、資本金は一千三百萬圓、內拂込が九百七十五萬圓、五十圓拂込濟の舊株が十三萬株、二十五圓拂込の優先株が十三萬株で、最近の決算報告に依るに諸積立金が百四萬五千餘圓、社債が七百六十八萬二千餘圓とある。

大阪商船株式會社

曾ては『ボロ船』とまで綽號された會社で、其の內部は謂ふ所の百鬼夜行の狀態であつたが、實業界の傑物たる中橋德五郎氏が社長として、快刀亂麻を斷つ的の大改革を施して以來、立派な會社になつて了つた。設立は明治十七年の五月、今の資本金は二千四百七十五萬圓、內拂込が千八百五十六萬二千五百圓で、五十圓拂込濟の舊株が三十三萬株、十二圓五十錢拂込の新株が十六萬五千株と云ふ勘定になる。當社が配當を抑制することは非常なもので、昨年上半期の收入などは純益三百四十四萬圓と云ふ巨額を計上したのに、依然として一割配當に止め、他の積立や償却を增して、更に事業擴張資金として一百萬圓を積立てたなどは全く大阪商船流である。而して此の新積立金は云ふ迄もなく戰後大いに活躍す可き海運界に供ふるの覺悟を示したもので、其の資金は元より充分ではないとしても其の意氣は大いに稱す可しである。更に昨年の下半期にあつては、本邦海運界未曾有の盛況と共に本社も亦多大の收穫を得、遂に一割配當のレコードを突破して二分の增配を決行し、株式市場の如きも五十圓拂込が一時は百三十圓以上に拔き、二月中旬の暴落後も依然百二十二三圓の所に落ち附いて居る。當社の如きは蓋し有望會社中の最たるものであらう乎。

東京瓦斯株式會社

當社は明治十八年東京府の瓦斯局を引き繼ぎ、僅かに二十七萬圓の資本金を以

て旗上げをしたもので、當分は何等の障碍物にも突き當らずに順調に發達して、明治三十三年には二百十萬圓てふ大會社となり、基礎鞏固が呼物となつて、株式は公債同樣の信用を博したものだが、千代田瓦斯を併合して獨占權を維持するの必要に迫られ、明治四十五年に資本金を現時の四千五百萬圓となし、內拂込三千八百萬圓に改めたのは、成程競爭者を退治した快感を伴つたのであらうが、一方から見ると之れが爲めに收入減の結果に陷り、偶〻電燈競爭てふ恐しい旋風が起つて、瓦斯會社も亦其の渦中に捲き込まるゝの災難に、會社の經濟狀態は著しく不印となり、一割七分の全盛時代も疾く過ぎて、一割となり八分となり、遂には積立金から九萬圓を遣り繰りして漸く七分の配當をする、其處で株主が狼狽して賣り放つた爲めに、五十圓拂込の市價が三十圓臺を覗くやうな騷ぎに、之れではならぬと工場の大整理、社員職工の大淘汰が斷行されて、假令營業上の收益は減じても、立派に七分の配當丈けは維持して來たやうな次第であるが、近來瓦斯の需要も增加して來る、戰爭以來副產物の收益も高が增すといふ景氣に、大正四年の下半期からは八分の配當が出來て、將來益々有望とあるからに、其處で株式の市價も拂込の五十圓を拔くに到つたのは先づ以て目出度い次第と謂はねばならぬ。

東京電燈株式會社

當社は明治二十年十一月の創立で本邦電燈業の元祖である。井守の黑燒や守田寶丹とは違つて、本家爭ひに何等の價値を認める譯でもないが、經歷は恐ろしいもので、多年の經驗に敎へられ、兎も角も恐ろしい競爭の渦まきを突破して相當の成績をあげて行く東電の手際は感服の外ない。今でこそ資本金が五千萬圓の內拂込が四千四百八十萬圓てふ大きな世帶になつて、積立が百七十萬、後期繰越が百餘萬圓、社債が約千百萬圓、株數から云ふならば五十圓拂込濟の舊が四十八萬株、四十圓拂込の新が五十二萬株、合計百萬株てふ大した數で、定期市場から此株を引き拔くならば一寸取引所の商ひ高が減じようと云ふ位のものだが、創立の當時日本橋で店を開けた頃には、僅か七十五燈用の發電機一臺でお茶を濁した程の小會社に過ぎなかつた。其れが段々と育つて行つて三十五

年には品川電燈を併合し、三十八年には資本金が七百萬圓、配當は年一割二分となつた。而して此の時分から一般電氣界の趨勢には漸く變化が來て、火力の時代は去つて水力に移りつゝあつたので、當社は茲に甲州駒澤に水力發電所を新設し、明治四十一年には其の工事が竣成を告げ、五萬五千ボルトの高壓送電に成功して、而も尙電力に不足を生ずる程の盛況に、會社はトン〳〵拍子に伸して行つたが、甘い汁を獨りで啜ることは婆婆での禁制とあつて、其後東京市電氣局の電燈開始となり、日本電燈の設立となつて、卍巴と入り亂れての大競爭に會社の收入は遞減し、九分となり八分となつたが、競爭も最早峠を越えたものと見て差支あるまい。更に當社の近況を聞くに、一般商工業の活躍に伴ふて電力電燈の需要は益々多く、之れに加ふるに同社は大正五年の一月に入りて本所、深川、淺草、下谷、神田の各區に亙つて料金の大整理を斷行した結果、一ヶ月約一萬五千圓の增收となつて、此等の整理や引上げ及び需要の增加からして、半期約三十萬圓の增收を期待することが出來るとあつては、社業の前途は先づ以て順調と觀測して差支ない。加之、市電の民間に移さるゝ日に於て何人が其の引受手なるかを想へば、社運の前途亦多望多幸なりと謂ふべきである。

日本電燈株式會社

競爭の爲めに生れて來た會社であると云つても可い。猛烈な電燈競爭の渦中に乘り出し、一ころは目覺しい奮鬪を續けて一部の喝采を博したが、競爭振が華やかであつた位が取柄で、營業の成績はテンデ成つては居ない。未だに以て無配當で、株式の市價は二十五圓拂込が漸く十八九圓である。合同問題が起るたんびに市價も昂騰するが、合同談が立消えとなると再び急轉直下の藝當を演じて居る。設立は明治四十四年の十二月で、資本金は千二百萬圓の內拂込が六百萬圓、先づ當分は無配當と相場の定つた株である。

富士瓦斯紡績株式會社

明治四十年の大相場の時には五十圓拂込のものが二百三四十圓の高値を呼んだ

例もあるが、其後大分悲觀せられ、彼れも五十圓臺のものさと蔭口を叩かれて、危ふく六十圓を支へた程に伸び惱んだ苦しい時代を經過し、昨冬來の紡績界の旺盛に他の紡績株と等しく騰貴して、今では百二十圓内外を上下して居る。全體思惑株としてはキチンと格式の定つたものよりかも、多少動きのあるものに却つて興味が深い譯であるから、此の株などは先づ以て盡きざる興味があるものと觀ねばならぬ。會社の設立は明治二十九年の三月で、當時の資本金は漸く二百萬圓に過ぎなかつたが、三十六年の七月に小名木川綿布會社を併合し、同八月には日本絹絲會社を買收して規模を擴大し、更に三十九年の七月には資本金を五百萬圓に增加し、同九月に東京瓦斯紡績會社を合併して社名を富士瓦斯紡績と改め、資本金も次第に肥え太つて八百萬圓となり、越えて同四十年には水力電氣工事を起して、自己の工場で使ひ殘した電力を他へ供給販賣するの計畫を立てたので、從來の資本金では聊か心細いとあつて、忽ちに千六百萬圓に增資し、更に大正二年の下半期には相模水力電氣を合併し、三年の上半期には又々二百萬圓を增資して、資本金千八百萬圓の内拂込千三百萬圓、五十圓拂込濟の舊株が十六萬株、二十五圓拂込の新株が二十萬てふ尨大なる會社と成り上つたのである。紡績會社としては、何れかと云へば後輩であるのに、斯くの如き大發展を遂げたのは見上げたものではあるが、目下尙大奮鬪の時代にあるので、今の時局を幸ひに更に鞏固に會社の地固めを爲すことが出來るならば、蓋し面白い前途を有する事にならう。

鐘淵紡績株式會社

紡績界の覇王を以て稱せられ、規模の宏大なる、事業の殷盛なる、社礎の鞏固なる、將來の有望なる、他に多く其の類を求むる能はざる所である。社長は斯界の元老として夙に聲名を恣まゝにした武藤山治氏で、他重役諸氏の手腕の光彩陸離たる亦人の知る所である。創立は明治二十年の五月で、當時日本橋區本町に資本金十萬圓で綿花賣買を營んで居た東京綿商社なるものが、本社の前身であるを想へば重役諸氏と雖も蓋し今昔の感に堪へぬものがあらう。現時の資本金は一千七百四十二萬七千六百五十圓の内拂込が一千四百九十六萬千六百

三十圓、株數は五十圓拂込濟の舊株が十八萬四千四百八十五株、三十五圓拂込の新株が十六萬四千〇六十八株、〆て三十四萬八千五百餘株と云ふ多數であるながら、而かも東西株式市場に於て兎角に實株賣物薄の姿である一事を以てしても、同株に對する人氣の如何を察する事が出來よう。當社が此のやうな信用を博し、此の如く資本の尨大を來す迄には、幾多の既設會社を買收し來つたので、試みに之れを列記して見るならば、三十二年には上海紡績會社の兵庫分工場を買收したるに次で、河州紡績會社、淡路紡績會社を買收し、三十五年には九州紡績會社の三池、久留米、熊本、博多四工場及び中津紡績會社を併合し、四十年の七月には日本絹綿紡績會社を買收して居る。斯くの如く既設會社の合併買收を主とした爲めに、機械や其他の設備が安直に出來て、固定資本に對する純益の割合が頗る優良であつたなども亦經營者の着眼宜しきを得たものと云つて可からう。更に近時の業況を如何と見るに、今(五年)上半期は時局の關係上頗る良好の成績を收め、既に下半期分の註文までも握つて居る程であつて、增配を決行する手筈とあつてはは唯々盛んなりと云ふの外はない。

日清紡績株式會社

買へば必ず損をするものと、惡い定評の附き纏つた株であつて、曾ては十七圓半の拂込が十圓以下に割れた時代もあつたが、待てば海路の日和とやらで、今では之れも花形株の一つとあつて二十八圓ドコを上下して居る。同社も斯界に於てはまだ新參ものゝ格で、創立は明治四十年の一月、資本金は一千萬圓の内拂込が三百五十萬圓、營業の成績は怎うかと云へば、四十二年の上半期に初めて五分の配當を爲し、イザ之れからと云ふ所へ水害と云ふ飛んでもない男が舞ひ込んでさん〳〵に惡戯を働いた爲めに、四十三年の下半期と翌上半期とが無配當、同年下半期が漸く五分一厘で、次が七分一厘、八分と次第に盛り返したが、矢張りうまく行かなかつたと見えて、三年の上半期は五分に減じ、近くは無配當にまで下つたが、之れではならぬと社内に革命を起して以來、昨年の下半期は八分に恢復し、今年の上半期は細絲の賣行が良好とあつて、内外の注文は澤山に入り込むと云ふ景氣に、二分增配の一割説が傳へられつゝあるばか

りか、重役側には增錘の計劃もあつて、近く素晴しい發展を劃策しつゝありと云へば、先づ以て前途有望な會社であらうか？

東洋紡績株式會社

鐘紡と轡を並べて斯界第一流の大會社である。設立は大正三年となつて居るが、其の實、當社は明治十五年創立の大阪紡績と、同十九年設立の三重紡との併合したもので、資本金は一千四百二十五萬圓の内拂込が一千三百萬九千二百二十五圓、額面五十圓拂込濟の舊株が十八萬五千七百三十八株、三十七圓五十錢拂込の新株が九萬九千二百六十二株、積立金が八百餘萬圓、後期繰越が百五十萬圓、從來の配當が一割六分、社長は斯界の頭目たる山邊丈夫氏で、副社長が同じく斯界の重鎭たる伊藤傳七氏と來ては、社の基礎が怎うの斯うのと云ひ立てる丈けが野暮な位だ。紡績業てふ事業其ものゝ性質から觀測するならば、其の經營は頗る困難なものと市の相場が定つて、多少の不安がコビリ附いて居るやうにも思へるが、當社のやうに大なる資本を擁して、之れを運轉するに老練なる經營者を以てするに於ては、發展は期して待つ可しである。果せる哉、大正四年の夏頃からは從來の華客である支那以外、更に南洋印度方面へ發展して、同年下半期の收益は上半期に比して九十萬六千餘圓を增加し、之れ丈けでも優に一割五分の增配を決行する事が出來る理窟ではあるが、徒に配當を增すのが本旨でもなし、且つ次期以降の要愼もあつて、僅かに二分增しの一割八分に止めた邊りは、所謂東洋紡績流の地味な遣り口として賞めて置かう。

尼崎紡績株式會社

株主に隨喜の涙をコボさせる手際に於ては御釋迦樣も跣足である。二十五圓拂込が先頃は百七十圓まで伸して、今でも百三十圓ドコに落ち着いて居る。配當が年三割で、積立も二百五十萬からある。創立は明治二十二年の六月、現時の資本金は六百四十四萬圓の内拂込が四百二十八萬圓、額面二十五圓拂込濟の舊株が十三萬七千六百株で、七圓拂込の新株が十二萬株であるから、會社としては必ずしも大なる會社ではない。其の規模は勿論小さくはないが、然りとて、

決して大袈裟な屋臺骨ではない。併し其の營業成績に至つては、少しく誇張して云へば世人を驚倒せしむるものがあつて、時には年七割の配當を爲したる時代もあつた。而して社の基礎の鞏固なるに從ひ、機に應じて資本を增加し、資本を增加すれば從つて收益を增すてふ仕掛けで、儼然として長く年三割の配當を維持して來た手際は敬服の外なしである。昨年東京紡績を合併し、續いて又日本紡績を併呑して現在の錘數は約三十九萬、健實を以て響いた會社である。

大日本製糖株式會社

津々浦々にまで高い噂となつて國民の腦裡に深い印象を刻み込んだ彼の日糖事件は、今から想ひ出してさへも身の毛が彌立つ。代議士は續々と檢擧される、秋山磯村の兩專務は獄裡に呻吟する、酒匂社長は自殺を遂げる。イヤハヤ大した大芝居を打つて仕舞つて、偖其處で此の汚名を拭き取る役目を誰れが勤めやうかと、彼れか此れかと役者を詮議した揚句、其の選に當つたのが現社長の藤山雷太氏であつた。元來頭の出來がよくつて劃策縱橫、下積になつた古い形容詞を用ひるならば所謂裁斷流るゝが如しとふ藤山氏が不眠不休でやつけたので整理は見事に效を奏した事になる。即ち明治四十二年七月の整理案編成當時の債務の總額は一千四百萬八千九百圓てふ大きな穴であつたのに、此の穴は次第に小さくなつて、大正四年末までに償還整理濟の負債額が一千十六萬六千圓、其處で殘りの借金は僅かに三百八十四萬二千九百圓となつた譯であるから、之れが成功でなくて怎うしやう。果然一時は五十圓拂込の市價が十三圓まで落ちた慘めな時代もあつたが、整理以後はヂリ〳〵に昂上して今では八十圓を拔いて居る。斯うなつて見ると、藤山社長の鼻の高いのは勿論のこと、社長を扶けて此の功績を爲さしめた伊澤、高山の兩常務も亦金鵄勳章ものだ。同社の設立は明治二十九年の一月で、資本金は一千二百萬圓の全額拂込濟、配當は年一割であるが五年上半期の豫想は一割二分である。而も同社の唯一のお得意である支那の砂糖需要は年々增加するの一方で、更に東洋以外へも新に販路を擴張するの計畫もあり旁、社業の前途は恰も旭日の東天に冲するが如き感がある。

鹽水港製糖拓殖株式會社

定期市場に於ける花形株の一つのである。思惑としては砂糖株中隨一の人氣者である。三十五圓拂込が七十五六圓と云ふ所を上下して居るのであるから大した人氣だ。併し一割四分配當のレコードが今年度(五年)は尠くとも一割八分で、都合に依つては二割の配當を豫期されて居るのであるから、七十五圓も滿更理窟のない譯でない。當社の設立は明治四十年の三月、其の始め資本金三十萬圓を以て創立された舊鹽水港製糖會社を買收して五百萬圓の新會社として旗を上げたのが始めで、四十三年には更に高砂製糖を併合し、大正三年には臺東拓殖製糖を合して今の資本額となつたのである。卽ち資本金は一千百二十五萬圓の內拂込が七百八十七萬五千圓、一株三十五圓拂込の二十二萬五千株と云ふ事になる。設立以來ぶつ通しての好況で、四十四年までは配當も二割であつたが、其後一割二分になつたり一割四分になつたりして、今度亦大いに盛り返さうと云ふ景氣である。根が砂糖會社であるのに、同社が樟腦へ手を出したり、採鑛牧畜、造林、伐木と色んな事へ手を出すので、一部に批難もあるやうではあるが、要するにタント儲けて配當する以上は株主にも文句が無くつて可い筈だ。敢て重役に代つて陳辯して置く。

臺灣製糖株式會社

臺灣製糖は製糖會社中の元老である。其の勢力の侮る可からざるものあるのは云はずもがな、其の基礎の堅實にして動かすべからざるものあるは人の知る所である。然れば兜町邊の黑人筋では此の株を稱して『押しも押されもせぬ糖界の大關』と呼んで居る。試みに此の會社の來歷を檢べて見ると、呱々の聲を揚げたのが明治三十三年であるから今は數へ年の十七歲である。當時の資本金は六百萬圓に過ぎなかつた。何しろ臺灣總督府と云ふ確乎した產婆さんが取り上げて、乳母の役まで此の人が勤めた程に、メキ〳〵と立派に生長して今では資本金が二千七百五十萬圓、內拂込が千八百四十萬圓、五十五萬株の大會社となり濟まして居る。而して此のやうに大きく育つまでには其の間、

二回の增資があり大東、臺南、怡記、埔里社の四製糖會社を買收併合して、着着事業の擴張を圖つて來たのである。營業の方針は飽迄地味な一方、堅いのが誇りで今日のやうな信用を博するに至つた譯だ。聞く所に依れば今回定款の改正を爲し、現行の年一回決算期を三月と九月の二回となす豫定であると云へば、從來株式思惑者が年一回の決算を不便とし、實質の優良である割合には人氣の乘らなかつた同株も、今後は決算期の分割と共に市場有數の建株となるであらう。同社は從來如何に多くの純益があつても株主の配當は年一割二分と定めて置いたが、今期(大正五年六月)はレコードを破つて二分內外の增配を爲すと云ふ。其の譯は本期の利益豫想額が前期に比しては約二百二三十萬圓を增加して五百八十萬圓と云ふ結構な算盤が出たからで、偖此の處分案が怎うなるかと云へば、前期繰越金が十萬九千圓、之れに今期の利益豫想額五百八十萬圓を合して合計五百九十萬九千圓となる。之れに對して拂込金千八百四十萬圓の配當額が二百五十七萬六千圓、外に、前期の例を追ふならば固定財產銷却が三十萬圓、法定積立金が十六萬三千圓、別途積立金が三十萬圓、配當準備金が三十五萬圓、賞與及交際費が十五萬圓、恩給及扶助基金が二萬圓、合計三百八十五萬九千圓の支出をしても、尙差引二百萬圓てふ巨額の剩餘金が出て來る。所謂綽々として餘裕ありてふのは這麼場合にでも拜借するに適當した文句であらうか。兎に角同社が流通資金に苦しめられると云ふやうな事もなく、何處やら悠然した所のあるのは、同社の內容が立派に充實して居るからであらう。

東洋製糖株式會社

思惑株として粗糖株中最も妙味のある株である。先づ會社の生立ちから洗つて行くが、創立は明治四十年の二月で、臺灣糖業勃興時代の所產である。資本金は千百萬圓の內拂込が五百九十萬圓、三十五圓拂込の舊株が十萬株に、二十圓拂込の新株が十二萬株、合計二十二萬株となる。製糖會社としては發育の可い方で、創立者の胸算通り先づ結構な算盤を彈いて、配當は一割二分の時代もあり一割五分の時代もあつて、前期は一割四分の配當であつた。其處景氣であるから、大正三年の八月には斗六製糖を併合し、更に同四年の五月には北港製糖

を併合して、壓搾能力三千五百五十萬噸てふ大會社となり濟まして了つた。所で最近の考課狀を開いて見ると社債二百五十萬圓とある。之れは全體何に使つたものかと云ふに、此の社債は昨年夏の募債であるが、其の使ひ途は一部が借入金の償還で、一部は事業の發展費に廻つたので、其れが爲めに、今後社運の隆盛聊か見る可きものがあらうとは當時からの期待であつたが、果然大正五年の決算期には七十五萬俵產出の好成績を示し、搗てゝ加へての粗糖昂騰で優に三百萬圓以上の利益を占め、株主からは二割五分に增配の要求が出たが、重役側の意見では增配よりかも先づ以て社の基礎を固める方針が可からうとあつて、結局二割位に落ち附かうと云ふのであるから、株式市場の人氣が惡からう筈もなく、昨今(五年三月)三十五圓拂込の親が九十七八圓、二十圓拂込の新が五十七八圓と云ふ高い所に坐つて居る。斯くて同株が放資株としても思惑株としても粗糖中妙味あるものゝ隨一なりとして推奬するの理由も明白になつた譯である。

新高製糖株式會社

製糖會社中では新顏の方であるが、土臺が確乎して居て經營方針の手堅い事に於ては、明治製糖と並び稱せられる程の堅實な會社である。設立は明治四十二年の十月、資本金は五百萬圓の内拂込が三百五十萬圓、一株額面五十圓の三十五圓拂込である。株式の市價は一シキリ二十八圓位まで落ちた事もあるが、今では拂込の倍額以上に伸して七十四五圓ドコである。依つて以て略其の内容如何を察することが出來やう。配當の一割二分は必ずしも結構な譯でもないが、株の大半は大倉一家のものとあつて、さう配當などを欲しがる理由もなく、世間態なども氣にかけずに、唯だ一意專心、會社の基礎を固めて行かうと云ふ方寸であるのが誇りである。工場は彰化と嘉義とにあつて、彰化の工場は四十三年の十二月に開始され、大正二年の七月には酒精の工場をも附設し、嘉義は第一、第二の工場で、第一は四十五年、第二は大正二年の開始であるが、何れも相當の成績をあげつゝある。此の社の異彩とも見る可きは鐵道の敷設に意を用ひつゝあるの一事で、彰化工場區域内には四十六哩餘、嘉義工場區域内には五十四哩餘の鐵道がのたくつて居る。

臺北製糖株式會社

創立は明治四十三年の八月、資本金は三百萬圓の內拂込が百八十萬圓、三十圓拂込の六萬株である。何しろ創立以來尙月日が淺いのと、引續いて蔗園が風水害でやられて來たのとで、成績はと聞いて貰ひたくない程の缺損勝に他の砂糖株が一列一體に好景氣に浮き立てる際なるに拘らず、此の社だけが頭痛鉢卷の哀れを止めて、相も變らぬ無配當かと貶さるゝ狀況であつたが、大正五年度に於ては(決算年一回)相當の成績を收めたらしく、五分乃至八分の配當は確實に出で來やうと云ふ業況に局面が展開したらしい。唯だ松方新社長の方針としては、此の際整理を斷行するの必要もあれば、目先の僅かな配當などには目を呉れず、斷然改革の斧を揮ふ覺悟で、今年度の利益を其の費用に充てゝ仕舞ふが可からうとある。之れは誠に結構な話であるが、多年配當を喝望して居た株主が之れで默つて引つ込むか怎うかゝ疑問である。其は兎に角に、さる砂糖通の談に聞くに、當社の蔗園は地勢上の關係からして蔗園の育成には持つて來いの良園で、

其れかあらぬか、近時臺灣の各粗糖會社を戰慄せしめつゝある彼の萎縮病の如きも、獨り臺北製糖の蔗園のみは素通りにしたやうな話もあつて、同社の前途は決して馬鹿にしたものではない。

帝國製糖株式會社

明治四十三年十月の創立とあつて之れも製糖會社中の新參である。當時の資本金は五百萬圓の內四分の一拂込で、元の松岡糖廓を買收して業務を開始したのであつたが、其の時の工場と云つては社の所在地たる臺中藍興堡一ヶ所あるのみであつた。所が其の後、採取區域の擴張と共に勢ひ資本の拂込となつて、現在では五百萬圓の內三百萬圓、卽ち一株三十圓の拂込である。而して一方事業の方はどうかと云ふに、大正二年十二月に分工場を設置して、其の能力は本工場七百五十噸、分工場三百噸、機械は獨逸の最新式とあれば申分のあらう筈もない。甘蔗採取の區域は約二萬餘甲、而して地味の良好なる蓋し全島に冠たりと聞いては成績の良好なるも無理ではなく、配當は年一割二分で、株式の市價

は五十七八圓である。

南日本製糖株式會社

日當りのよくない場所に生えた樹木に似て、兎角に發育が完全でない。第一に其の創立の時期からして宜しくないので、同社の生れた明治四十五年は臺灣糖業の厄年とも云ふ可く、創業以來天災は頻りに起る、年々歳々の暴風雨では蔗園も堪らない、搗てゝ加へて經營者も其の人を得ず、甘蔗の植付なども收穫の見込の多い所を棄てゝ、却つて鐵道の沿線とか若くは手近な所で、人の眼に附き易い場所を選拔して徒に外見を修飾するに努め、會社の幹部は實地踏査の勞を惜しんで下級社員の誇大の報告に依賴し、實際收穫の時期になつて見ると案外な違算が出て來ると云ふ始末に、其處に失敗の因を孕んで、一般放資家の頭痛鉢卷となつたのである。會社の事業其の物から觀れば決して悲觀の要はなく、經營者其の人を得るに於ては、良好の成績を擧ぐるに難くないと其の道の專門家は觀測して居る。株式の市價は三十圓拂込のものが一時十圓四五十錢で、

殆んど拂込額の三分の一に過ぎなかつたが、之れは一般放資家が既往の成績に鑑みて前途を悲觀した結果であつて、其の財產狀態も根こそぎ洗ひ立てゝ見れば案外にも評判程の缺陷はなく、營業も意外に望みのある事が判明して、加ふるに帝國製糖との合併談などの好材料が手傳つた爲めか、此の頃では拂込三十圓の市價が三十七八圓に伸して居る。確實な株ではないが思惑株としては面白味が尠くない。

明治製糖株式會社

石橋を叩いて渡る主義の會社として名高い。株式不況の時代にあつてさへ五十圓拂込の市價六十圓を保つた位の人氣のある會社で、此の頃は市價百圓を拔いた例もある。粗糖の產額に於ても其の道の二三流ドコであらう。明治三十九年十二月の創立で、資本金は千二百萬圓、內拂込が八百九十二萬五千圓、五十圓拂込濟の舊株が十五萬八千株、十二圓五十錢拂込の新株が八萬二千株、合計二十四萬株と云ふ數になる。配當は何時も一割二分で積立が百四十二萬圓、以て

社礎の如何に鞏固であるかゞ窺はれやう。加ふるに今期(大正五年上半期)の成績も亦圖抜けて良好で甘蔗の大豐作及び其の歩留の良好なると、糖價の昂騰したることに依つて、年二割までの增配を行ひ得る程度にあれば、今後投資株としても思惑株としても可なり面白味があるやうに想はれる。

沖臺拓殖製糖株式會社

當社は元沖繩製糖會社の名の下に呱々の聲をあげたもので、當時は沖繩縣下で赤糖の製造をやつてゐたのであるが、四十四年の十二月に同縣西原所在の農商務省沖繩糖業改良事務所局分密糖製造工場の拂下げを受げて之を第二工場とし、更に大正元年には臺灣の雲林合資會社を買收して現在の社名に改め、茲に大に其の規模を擴張して赤糖及び樟腦の製造の外に、輕便鐵道にも手を染むることゝなつたのであるが、其後工場とも赤糖の製造は止めて專ら分密糖の製造を業として居る。現在の資本金は二百萬圓の全額拂込、一株五十圓拂込四萬株で、配當は七分から九分、九分から一割と增して今日に至つて居る。斯樣に順調に發展して見ると、勢ひ擴張の翼を擴げて見たくもなつて、近々新株六萬株を募集して二百萬圓の資本金を五百萬圓に增資し、其の資金を以て沖繩縣ムスクに分密糖製造工場を新設する計畫であると云ふからには、先づ以て前途有望な會社であるに相違ない。

臺南製糖株式會社

決して馬鹿にした株ではないが兎角に閑却され勝なのは、まだ創立早々で貫錄が足らぬが爲めであらう乎。成程、會社の創立は大正二年とあつて、年齡から云へばまだ漸くハイ〳〵の出來るか出來ぬ位のところで、獨り歩きも險呑な位のものであらうが、新會社とは云ひ條、其の實は旣設の事業を買つて出たのであるから、其れ故にこそ創立早々ではあるが相當の成績をあげて、配當は年七分、株式の市價は二十二圓半の拂込が二十五六圓とあれば、先づ以て滿足せねばなるまい。社長は議會でも財政通として近來一寸男をあげた國民黨の鈴木梅四郎氏で、株主は多くは三田系統の手堅い連中である。マア安心の出來る手堅

い會社であらう。

寶田石油株式會社

油價は猛烈に騰貴して、日石も寶田も資本要らずの懐手で自然と札の束が殖えて來るやうな工合になつて、株主の增配運動が起るのも滿更無理ではない。果然本年(大正五年)四月の總會を前に控へて、一部の株主からは一割二分配當の外に三分の增配要求が出たのであつた。何しろ日產の二千石は今後十年間も動かぬものと見越されて、而も石油の市價が四割乃至九割の暴騰と來てはうまい話だ。此處で石油の分析でもあるまいが、日石の秋田の油田は大部分が下等燃料たるアスファルト液で、燈油分は二割五分に過ぎないが、寶田の越後の油田は何れも燈油分が多く、西山が九割五分、東山が六割五分、新津が二割五分と云ふ割合で、而かも其の殘餘の副產物が亦日石の秋田に比して上等であるから、今日のやうに燈油や機械油の暴騰した場合には、日石に比して寶田の方が非常に割が可いので若しも少し頭のある人が算盤を持つならば、其の株も日石より

は、ヨリ多く寶田に買餘地のある位は直ぐに分る筈であるのに、矢張り市場の人氣と云ふものは恐ろしいもので、寶田よりも日石に興味を有つ人の多いのは止むを得ない次第である。寶田の創立は明治六年の三月、元は一萬五千圓の小會社で爾來年々幾つかの石油會社や組合を買收し、去る四十一年に南北石油を合併したるを最後に總て八十七と云ふ多數の會社組合を買收し、其買收の度毎に會社も太つて行つて今のやうな盛況に達したのであるが、若しも石油界の此の活躍にして當分繼續さるゝに於ては、軈ては資本の增加に次いで、遠からず大々的發展の日が來るのではあるまいかと想像される。

日本石油株式會社

石油礦業なるものに對して不安の念を抱きつゝあつた邦人の迷夢を打破して、石油業に對する投資者の頭を改造した事に於て日石及び寶田の功績は亦偉なりと云ふ可しである。資本金二千萬圓てふ此の大會社も、創業の當初は僅かに十五萬圓てふ會社に過ぎなかつたのは人の知る所であつて、爾來事業の進步發展

の目覺しく、三十四年には早くも百二十萬圓に增資し、三十九年には更に倍加して二百四十萬圓となり、同年末には五百萬圓、四十三年には一千萬圓と伸して、增資又增資、擴張又擴張と云ふ勢ひであつたが、其の增資の內約五百萬圓は新に株金を募集した譯ではなく、積立金を引直して增資に充てたのであつた。以て社業の發達の如何に駸々乎たりしかを想像することが出來やう。而も大正二年に至つては一千萬圓の資本も尙ほ過小なるを感じ、更に擴大して一躍二千萬圓の大會社と伸したのであるが、試みに二十有餘年の創立當時を回想するに於ては、當事者と雖も亦隔世の感に堪へぬものがあらう。更に其の配當如何にと見るに、同社が一意專心、社礎鞏固を冀ふて徒に增配を欲せざるに拘らず、毎期多きは三割、尠きも一割二分を降らない。而してコ、數年間は年二割をレコードと爲し、東西株式市場に於ては東株に次ぐの花形株として市場の人氣を吸收し、常に數十圓の波瀾を繰り返して、投資者思惑者の興味を唆りつゝあるに、彼の秋田に於ける一萬石噴油の如き、株式市場を震撼せしめたる餘興の突發するに至つて、同株の人氣は彌が上にも高まつた譯であらう。而かも社會の發達、工業界の進歩に伴つて石油の需要は益々多く、歐洲戰爭の結果更に一層其の需要を喚起したるの事實もあつて、石油鑛業の前途には幸運の世界の限りなく擴大されつゝあるの事實なるに於ては、此の株の前途は益々有望なりと斷ずるの外言ふ可きの言葉もない。

株式會社横濱取引所

取引所として產聲をあげたのは明治二十七年の日淸戰爭當時であるが、明治四十三年の三月に舊横濱蠶絲外國品取引所と舊横濱米穀株式取引所とが夫婦となつて、其の新世帶が標題のやうな名稱に化けたのである。資本金は百八十萬圓の全額拂込濟、一株の額面が二十五圓で株數は七萬二千と云ふ事になる。而して實際取引の狀況は怎うかと云ふに、株や米では手近な東京に本場所があつて比較するならば國技館の大勝負と田舍の相撲の丈競べのやうなものであるから、等しく乾坤一擲の賽の目を振つて見やうと云ふ人も、株ならば兜町へ、米ならば蠣殼町へと足が向く理窟で、横濱の方はマア一寸お義理の賣買があると云つ

た形であるが、生絲となつては流石に本場所丈けに目覺しいものであつた。併し此の方も歐洲戰爭以來兎角不振の傾向で、最近は資產の利殖か何かで漸くに辻褄を合せて來たらしい。而も昨今生絲の市價も漸く恢復し、從つて定期生絲の賣買も殷賑を極むると云ふ景氣の所へ、株式の方も東京の繁昌に感染して漸く旺盛を極めやうかと云ふ氣配を示し、從來の建株の外に日石、日糖、東洋糖其他の數種を加へて人氣を添へつゝあれば、收益も次第に增して來るのは當然で、既に增資問題などもポツ〳〵と話題に上つて來る程であるから、之れから先きは多少面白い芝居が見られるかも知れない。

株式會社 東京米穀商品取引所

明治九年の設立であるから各種株式會社を通じての元老株で、人間ならば頭の光る年輩故、其の歷史には幾多語る可きの波瀾もあるが、其の實質に到つては大阪の堂島に及ばざること甚だ遠い。米と云へば直ちに堂島を聯想する程で、堂島の米株は人氣を集めて居ると同時に、從つて相場も高く伸すが、東京の米株は一寸丈競べが出來ない。試みに現在の株式の市價で比較して見るならば、堂島は一割二分の配當で五十圓拂込の市價が百五十圓であるのに、東京のは一割六分の配當でありながら五十圓拂込の市價は百十圓である。併し此處まで漕ぎ附けたのは根津さんが理事長となつて根本的の改革を斷行したからで、ツイ此の頃まではモツト憐れな所に彷徨つて居たのであつた。更に遡つて會社の生立ちから其の成長の歷史を語るならば興味もあらうが、却々に小面倒でやり切れない。其處で試みに日露戰爭當時からの發達の有樣を檢べて見ると、其資本金も明治三十七年にはまだ四十萬圓に過ぎなかつたので、其れが四十年には百萬圓となり、更に四十一年には東京商品取引所と合併して、其翌年には百五十萬圓に增資し、四十五年には又も資本を倍加して一躍三百萬圓に增資するの決議をしたのであつた。所で資本の方は年々歲々に大きくなつて行つたが、利益の方は却つて反對に減じて行つて、三十九年の下半期には十割てふ破天荒の好配當を敢行し得たのに、其後漸次遞減して一割までも落ちたのであつた。併し一割の配當は既に落ち附く可き所に落ち附いたものと見えて、其後再び盛り

返して、大正四年の下半期には親が一割六分の新が一割二分に伸したのである。ダガ慾を云へば取引所株など云ふものは一種獨特の魔力を有するものであるから、モ少し派手に景氣を附けて欲しいやうな心地がする。

株式會社 大阪堂島米穀取引所

何と云つても本場は本場は丈けに却々に盛んなものだ。堂島と云へば昔からの米の集散地で、取引所の開かれざる以前に既に此の地に米の賣買取引があつたのだと云ふから、他の米穀取引所に比較して少々異彩を放たねば第一歴史が承知しない譯であらう。現在の資本金は二百萬圓の内拂込が百六十萬圓、五十圓拂込濟の舊株が二萬四千株に、二十五圓拂込の新株が一萬六千株とあつて、先づどうやら一人前の會社であるが、明治九年の創立當時はホンの會社と云ふ名義丈けで、極めて小資本の頗る不完全なものであつた。明治三十七年の日露戰爭當時には資本金が增大したとは云ひながら、尙且つ公稱資本は二十五萬圓であるから、其の以前は推して知る可きであらう。所が三十九年に至つて俄に五十萬圓に倍加し、更に四十年には一躍百二十萬圓に、越えて大正二年には二百萬圓に擴大したのである。當取引所の一の特長とも云ふ可きは、資本金の增大せるに拘らず其の利益歩合の共に增して行く事で、其の趨勢にして變化せざるに於ては、將來或は面白い活躍を期待する事が出來やうかと想像される。

株式會社 大阪取引所

一口に東西株式市場と云ふ。卽ち東に在つては兜町、西に在つては北濱で、東西呼應して大に市場の人氣を煽る譯であるから。大株も東株と並べ稱せらる可きであるが、其の實、役者が一枚下に見えるのは、畢竟するに過去に於て種々な紛糾を重ねたが爲めであらう乎。若くは株の内容が充實せぬが爲めであらう乎。併し、此種の株は他の會社の夫れとは違つて、内容や何かや超越した一種の魔力を持たねば面白味が薄いのであるから、北濱の理事者なども大いに此の點に注意して此の頃大分芽を吹かせた樣子である。當取引所の設立は明治十一年の六月で、例に依つて最初は僅かな資本であつたが、明治三十七年には六十

萬圓に、同三十九年には二百萬圓の内拂込が百三十萬圓に增資し、更に四十年には其の全額を拂ひ込み、同下半期には一躍七百萬圓に伸びて内四百五十萬圓の拂込となし、四十三年の上半期には全額拂込となつて、結局明治三十七年から四十三年までの僅か七年間に其の資本金が約十二倍した譯で、斯樣なレコードは他に其の類例を見ざる所であるから、依つて以て當取引所の發展が如何に急速であつたかを證する事が出來る。而して當所の背景を爲す所の關西事業界の殷盛と、株式數量の增加とは、今後北濱市場に如何なる景氣を添ふるであらうかゞ興味ある問題で、恐らくは刮目して俟つに價するものがあらうかと信ぜらるゝ。

株式會社名古屋株式取引所

東に東京、西に大阪を控へて謂ふ所の中京に所在する取引所であつて、其營業の盛んなる點に於ては東京、大阪の次位に在る。設立は明治二十七年の一月、現在の資本金は百五十萬圓の全額拂込濟、一株額面二十五圓の六萬株である。最近の配當は年一割四分四厘で、二十五圓の市價が百四十五六圓は盛なりと謂つ可しだ。今試みに當取引所の發達を顧みに、名古屋其物の發達の急速なるが如く、取引所の發達も亦甚だしく急激であつて、明治三十八年以降明治四十二年に至るの僅々五年間に於て、資本を擴大すること驚く勿れ實に十五倍てふ破天荒のレコードを作り、而も此驚く可き急速の脹膨を敢てして尙且足れりとせずして、近く增資の計畫もあると云ふが、取引所などはマア斯うした逆上せ方をするのが上々で、其處に始めて取引所株の魔力も出て來やうと云ふものだ。增資も可なり。膨脹も可なり、大いにオキャーセ族の意氣込を示すが可からう。

南滿洲鐵道株式會社

大なる資本、大なる事業、大なる特權なんど凡て大の字を以て飾り立てるに適はしい日本一の大會社である。明治三十九年の十一月二十六日に勅令第百四十二號に基き外務、大藏、遞信三大臣の命令に準據して設立された特殊會社で、其の資本は少し大きく出て二億圓、内一億圓が政府の持株で其の殘りの一億圓

が一般公衆からの募集株であるが、此の內現に募集濟のものは第一回の十萬株と、第二回の二十萬株とである。而して政府の五十萬株は一株額面二百圓の全額拂込濟、公衆からの募集株第一回分の十萬株が同じく二百圓全額拂込、第二回の二十萬株が一株四十圓拂込更に未募集が二十萬株と云ふ事になつて居たが、株主一般からの希望もあり旁々、大正四年の十二月に一株の額面を百圓に改めたのは機宜の處置で、之れに依つて定期現物兩取引の不圓滑を除き得るに相違ない。試みに其の配當率を見るに、一般株主に對して六分の配當を爲し得る場合でなくては政府の持株には配當をしない規定で、又政府の持株に對して二分の配當を爲し得る場合には普通の株主は二分の特別配當が貰へると云ふのであるから隨分割の可い話である。更に其の營業はと云へば、本業の鐵道の外に海運業もやる、鑛山業もやる、電氣もやる、瓦斯もやる、宿屋もやると云ふ譯で而も其れ等が何れも大仕掛けで大陸的で、鐵道は固より他の事業も次第に純益を增して行くと云ふのであるから、政府の保護ほど結構なものはない。利益配當は開業以來大正元年迄は一般株主に對して年六分、二年には七分、三年には八分と增して來た所へ、今年(大正五年)からは新に滿蒙利權の開發に手を染めると云ふから同株の前途には云ひ知れぬ甘味が含まれて居る譯である。

東武鐵道株式會社

鐵道が國有となつて以來、放資株や思惑株としての鐵道株が甚だしく寂寞を感ずる今日、東武などは大いに市場の注目を惹かねばならぬ筈である。創立は明治三十年の十一月、資本金は九百萬圓で內拂込が四百八十八萬三千圓、舊株が五十圓全額拂込濟で五萬四千八百株、第一新株が二十圓の拂込で五萬三千株、第二新株が十五圓の拂込で七萬二千二百株である。今や東京足利間大田伊勢崎間を營業線として、其の軌道の總延長百餘哩に及び、現在私設鐵道中の冠たるものである。大正元年下半期以降、同三年の上半期までは一割の配當を維持して居たが、何處も同じ一般不景氣の打擊で收入減となり、三年の下半期が八分、前期は七分四厘の配當であつた。併し一般の景氣も盛り返した事であるから、將來一割の配當を恢復するなどは俗に云ふ朝飯前の仕事であらう。聞く所に依

れば東京足利間に電車を併用するの計劃もあり、又東上鐵道及び利根發電の併合說などもあつて、滿更根もない噂でもない樣子であから株としては一寸面白味がないでもない。

成田鐵道株式會社

其の名の示すが如く成田の不動樣を目的の鐵道である。創立は明治二十六年の十二月で、以來歲を閱すること二十餘歲の長きに亙つて、而も不動樣の御利益は餘り顯著でないと見えて、久しい間五六分の配當でやつて來たが、大正二年の上半期から七分の配當になつて今日に及んで居る、考課狀面は頗るあつさりしたもので、借入金もなければ社債もない、株數は總て四萬八千五百株、一株額面五十圓の全額拂込で資本の總額が二百四十二萬五千圓、唯だ之れだけの貸借關係である。營業線路は我孫子、成田、佐倉間四十五哩餘で、最近此の線路を利用する遊覽客の增加が極めて顯著である事と、運輸貨物の次第に增加する事とに依つて將來一割位の配當を豫期する事は左迄困難とも思はれない。

横濱鐵道株式會社

設立は明治三十七年の三月、資本金は三百五十萬圓の內拂込が三百十四萬圓、配當が年三分五厘、株式の市價は五十圓の親が二十六七圓で、三十五圓拂込の新が十六七圓であるから、以て其の內容如何を察する事が出來よう。デモ重役連は何れも財界知名の士で、社長には渡邊福三郎氏あり、取締には若尾幾造、根津嘉一郎氏などが顏を連ねて居る。

南海鐵道株式會社

人生意の如くならずと云ふが、會社も亦景氣の可い無事な生涯許り送れるものではない。北濱市場に於ける南海鐵道株の過去の人氣と云ふものは實に素晴らしいものであつたが、阪堺軌道と云ふ競爭者が現はれて以來尠からぬ打擊を受けて、ぢり〳〵の收入減に一割の配當は九分となり八分五厘となつたが、其の八分五厘も怎うやら無理があるらしい。資本金は一千萬圓、內拂込が七百六十

萬圓、借入金及び社債が約四百萬圓、積立金が四十萬圓、繰越金が十八萬圓と云ふのが最近の考課狀である。

博多灣鐵道株式會社

設立は明治三十三年の六月、資本金は二百七萬五千圓の内拂込が百五十二萬五千五百圓、一株三十七圓の拂込で、配當は七分八厘、株式の市價は辛うじて拂込額に屆かうかと云ふ所である。專務は福原有信氏で取締役に岩谷松平氏監査役に高木兼寛男なんどの變り種が並べてあるから面白い。

常總鐵道株式會社

其の起點は常磐線の取手驛、終點は下館町である。其の地方の人に取つてはなくてならぬ便利な鐵道であるが、大體から見れば枝線の又枝線で取り立て〻云ふほどの價値はない。資本金は百萬圓の全額拂込濟、格別缺點のある會社ではないが放資株として新たに手を出す程の資格を備へて居ないのは勿論である。

川越鐵道株式會社

中央線國分寺驛が起點で終點は川越町、延長僅かに十八哩、資本金は漸く五十萬圓の四十三萬圓拂込と云ふ小さな鐵道である。デモ先頃までは東京から川越へ行く唯一の交通機關であつたので、柄の小さな割には株式市場の人氣者であつたが、東上鐵道と云ふ競爭線が現はれてからは忽ちに打擊を受けてガラリと人氣がなくなる。將來は悲觀の一方であるが、會社の狀態が奈落の底へ急轉直下する譯でもないから、經營さへうまくやつて行けば俄かに無配當など云ふ心配はあるまいと思はれる。最近の配當は一割である。

東上鐵道株式會社

何と云つても未成品である。株式市場に人氣の乏しいのも止むを得ない。加之、賣り放つて拂込の義務を免れやうとする人もあつて、株式市價は常に安いが、前途には相當に希望を孕んで居る。會社の設立は明治四十四年で資本金は四百

五十萬圓、内拂込が百十三萬百五十五圓、株數は八萬六千九百三十五株で、一株の額面が五十圓内十三圓の拂込になつて居る。豫定線は東京、川越、高崎、澁川間であるが、工事の完成して現に營業を開始して居るのは池袋、田面澤間二十一哩である。配當は年三分强。

小倉鐵道株式會社

船頭多くして船が山へ登つた譯でもあるまいが、徒に重役のみ多く取締役が十名監査役が四名、〆て十四名の顔揃ひであるが、兎角に經營難に苦しんで居る。株金は全額拂ひ込んだ體裁になつて居て、其の上に百八十餘萬圓の借入金も背負つて居る程であれば餘程氣永に構へて居ねば配當などは思ひも寄らぬらしい。明治四十四年六月の創立で、鐵道の外に採銅と海面の埋立が營業の目的となつて居る。大正二年以來鋭意鐵道の建設と海面の埋立工事を急いだ爲めに東小倉、上添間二十四哩六分の工事が完成して、大正四年の四月から兎に角に汽車は煙をあげた。本社も之れから眞實の活動期に入るので、將來相當の收入を得可き見込は充分であるから折角氣永の活動を望む。

京濱電氣鐵道株式會社

明治三十一年三月の創立である。一時は一寸人氣を集めて一割三分からの配當をした例もあるが、國鐵側が列車の發着を多くしたり、料金の引下げを斷行したり、近くは又最新式の電車を走らせると云ふ目覺しい活躍に押されて、目下同株は悲觀の頂點に達して居る。併し怎うやら既に難關を突破するの見込みも立つたらしく、近來沿線川崎には富士紡の分工場や東京電氣の工場が移轉して來る、鶴見大師河原間には日本鋼管、安田製釘所、旭ガラス製造所なんどの工場が續々と所設されて、沿線の人口が俄に膨脹する、從つて同社の電燈事業が有望になると云ふ好影響もあり、又同社には沿線に運河新設の計畫もありと云へば將來は有望であるに相違ない。資本金は五百十萬圓の内拂込が四百五十九萬圓、額面五十圓の拂込濟が五萬一千株で、四十圓拂込の新が五萬一千株、積立が二十一萬圓、社債が百八十萬圓と云ふ有樣で、今迄やり來つた六分の配當

がどうやら怪しく、財産狀態は餘り鞏固ではない。

阪神電氣鐵道株式會社

何しろ大阪神戸間と云ふ立派な營業區域を占領して居るのであるから馬鹿に景氣が可い。其の營業振も群を拔いて居ると云ふやうな關係で、東西を通じての電鐵界の覇王とも稱す可き地位にある。明治三十二年六月の創立で營業を開始したのは三十八年の四月である。場所柄丈けに最初から景氣がよく、其の年の上半期に六分の配當を爲し、同下半期には八分、翌三十九年の上半期が一割一分、更に其の年の下半期には一割二分に伸して今では一割三分の配當である。資本金は七百萬圓の內拂込が五百四十萬圓、舊株六萬株は一株額面五十圓の拂込濟で、新株八萬株は三十圓の拂込である。最近の考課狀に依るに積立金は九十萬四千圓、借入金が二百七十五萬圓、後期繰越金が七萬八千八百圓であるから、社債の多いのが一寸目障りである

橫濱電氣鐵道株式會社

明治三十五年四月の創立である。資本金は六百萬圓、內拂込が四百六十五萬圓、株數は舊株が五十圓拂込濟で四萬株、第二新株が二十七圓五十錢の拂込で六萬株である。營業の成績は開業の當時から惡くはなかつたが、其の營業區域は餘り廣くもない橫濱市を中心として居るので、乘客には自ら限りがある。從つて收入も或る程度を超ゆることが出來ぬと云ふので、重役連が頭を捻つた結果、關外線の新設とか、鎌倉橫須賀線の延長とか、會社相當の計劃をして、其の部分的の竣工と共に營業狀態は漸次良好になる、同時に土地や建物に向つての放資も機宜に適したと云ふやうな譯で、株主の配當も五分から六分、六分から七分と伸して、三年の下半期には八分の配當をしたが、四年の上半期は何處も同じ不景氣の打擊で六分に減じて仕舞つた。併し會社の營業狀態から見るならば、今後八分に盛り返すことの必ずしも困難でないのは明かである。社債が百五十萬圓、積立が十五萬圓で、後期繰越の三千百圓は聊か物足りない。

京阪電氣鐵道株式會社

京、大阪間の本線二十八哩と宇治線四哩とが營業線である。明治三十九年十一月の創立で、當時は十二圓半拂込の市價が八十何圓と云ふ驚く可き珍値を出して、凄じい人氣であつたが、愈々工事が竣成して營業を始めて見ると、案外にも豫期に反して成績は甚だ面白くない。配當も漸く年五分とあつて、株式市場の人氣は忽ちにして奈落の底に落ちて了つた。其處で重役連も頭を痛めて種々なる發展策を講じた結果、一時は六分五厘の配當まで漕ぎ附けたが、今では矢張り五分に返して了つた。資本金は一千五十萬圓、一株五十圓の全額拂込で二十一萬株、積立金が十六萬千圓の社債借入金が二百四十四萬圓、後期繰越が一萬八千七百圓と云ふ算盤で、さし當り餘り見榮えのする會社ではない。

箕面有馬電氣軌道株式會社

左程景氣の可い會社でもないが、株式市場の人氣が其の割合に衰へぬのは阪神電鐵との合併を見越しての事であらう。明治四十年十月の創立で資本金は創立の當初から五百五十萬圓、内拂込が三百三十萬圓、一株額面五十圓の三十圓拂込で十一萬株である。四十二年の三月に營業を開始して、當時五六分の配當であつたが、當事者も株主も其れでは滿足が出來ないとあつて、其後電燈電力の供給や土地家屋の賃貸などをやつた結果、大いに面目を改めて七分の配當を爲し、大正二年下半期まで此の配當を維持して來たが、最近一二期は五分五厘に減じて居る。社債は二百萬圓、積立が七萬七千七百圓で、後期繰越は十七萬餘圓である。

成宗電氣軌道株式會社

成田の不動山と佐倉の宗吾神社との間をブラ附いて居る電車である。資本金は五十萬圓で内三十五萬圓の拂込、一株額面五十圓の三十五圓拂込であるが、其の三十五圓の株が唯の二圓か三圓と來ては安いものだ。一株二三圓ならば五百圓もあれば二百株は買へる。其の二百株を種にボンクラでも欺くには誠に適當

な株であるが、さうあつては不動樣や宗吾神社が默つては居ぬであらう。兎に角創立以來ブッ通しの無配當で、今後も更に目鼻が附かぬとあつては氣の毒も亦極まれりだ。何とか活を入れる途はないもの乎。

小田原電氣鐵道株式會社

投資株として思惑株としても聊かも興味のない株である。明治二十九年七月の創立で資本金は二百二十萬圓、内拂込が百六十七萬圓、株數は五十圓全額拂込濟が一萬四千株、新株三十圓拂込が二萬六千五百株、額面五十圓全額拂込濟の優先株が三千五百株となつて居る。積立金は五萬九千六百圓で、社債が百六十五萬圓、配當は優先株が年一割で普通が年六分五厘である。同社將來の難關とも目す可きは鐵道院の熱海線で、此線が出來た曉には、此の社の國府津小田原間は手もなく廢物に歸するに相違ない。社經營の前途も亦難い哉の歎聲が期せずして重役間に發せられて居る事であらう。併し本線の終點が箱根であり、又附近に電燈を供給して居る以上、さう絶望する必要はない。

玉川電氣鐵道株式會社

都市の膨脹と玉川河畔の遊覽とを目的の電車で、市電澁谷の終點から玉川に至るの一線である。資本金百萬圓の二萬株で舊株は慘めなものだが、優先株は常に一割乃至一割二分の配當を受けて居る。此の電車には玉川砂利の運搬てふ副業がある上に、近時沿線郊外の發展目覺しく、隨つて電燈の需用も著しく增加するの傾向あれば決して見棄てたものではない。

京都電氣鐵道株式會社

明治二十七年二月の創立で本邦に於ける電氣鐵道のハシリである。資本金五百二十五萬圓の全額拂込で、且つ六十萬圓の社債がある。四十一年から四十三年まで一割の配當であつたが、其後成績は段々と下り坂になつて、曾ては無配當の苦しい時代を經過し、今では四分の配當である。御大典では大分餘分の收入もあつたさうだが、御大典は毎年ある譯でもないから、今後も依然として業況

の香しくないものと見ねばならぬ。

武藏電氣鐵道株式會社

其麼鐵道が何處にあるかとのお尋ねは尤もな次第である。澁谷から横濱へ一直線に、最新式のボギー車を走らせると云ふ前觸丈けは確かなものであつたが、會社が設立されて六年を經過した今日、まだ工事さへ始まらぬ樣子である。デモ千百萬圓と云ふ大會社で、一株十二圓半の拂込は濟んださうな。勿論ウッカリ手の出せる株ではない。

名古屋電氣鐵道株式會社

明治二十七年六月の創立で、本邦電鐵界の古參株である。其の始めは小ジンマリとした小會社であつたが、營業の發展と共に次第に伸して行つて、今では資本金七百五十萬圓の大會社である。内拂込が五百萬圓、舊株十萬株が額面五十圓の全額拂込で、新株十萬株は未拂込である。最近の決算報告を見るに、積立金が十六萬八千圓で、二百萬圓の社債を背負つて居る。今は年八分の配當であるが、曾ては一割五分の配當をした時代もあつて、株主もホク〳〵ものであつたが、四十五年に輕便鐵道を兼營するに至つて、配當が八分に減じたのである。併しもう注ぎ込む丈けのものは注ぎ込んで了つたのであるから、之れから先は收穫の時代で前途に望みの多い株である。

伊那電車軌道株式會社

信州は伊那の谷合に巢を構へて電車と電燈とを兼營して居る會社である。專務は伊原五郎兵衞さんてふ變り者で、袁世凱と大總統の競爭をやつて見たいなどと怪氣焰を吐いた男である。此の人が町の宿屋にゴロ〳〵しながら號令を發して居るのだが、案外良好の成績をあげて、四十五年の上半期から八分の配當を繼續して居る。四十年九月の設立で資本金は百五十萬圓、内百五十萬圓の拂込、一株は五十圓で内三十五圓の拂込になつて居る。

王子電氣軌道株式會社

明治四十三年四月の設立で資本金は一百萬圓の全額拂込濟、更に三十萬圓の社債がある。創立以來僅かに二期丈け四分の配當をしたに過ぎない。爾來今日までの無配當は尙忍ぶべしとしても、今後何等かの活路を探し出さねば會社が息を引き取るのではあるまいかと觀測される。此の株が投資の目的物たる資格のないのは改めて云ふ迄もない。

富士身延鐵道株式會社

明治四十五年の設立で資本金は四百萬圓、内百萬圓の拂込である。株數は八萬株で一株五十圓の内十二圓五十錢の拂込といふ譯だ。東海道の富士驛から大宮身延を經て甲府へ出る延長五十六哩の鐵道を引つ張つて東海道線と中央線との連絡を取らうといふのが主要の目的で、併せて大宮横割間と鈴川長澤間に鐵道馬車を經營する計畫である。今はまだ一分開通した丈けであるが、全通の曉は甲信方面より東海道に向ふ旅客の之れに據る可きは勿論、沿道には身延の靈場もあり、富士登山者にして此の線を利用するものも亦澤山有らうと云ふ勝算の歴々たるものがあつて、將來は侮る可からざる有利なる株となるかも知れぬ。配當は全線開通まで利息配當の形式を採る筈で年五分である。

京成電氣軌道株式會社

市場の人氣ほど恐ろしいものはない。四十三圓拂込の株へ何時も高々二十四五圓と云ふ相場を附けて置くので、此の會社は何か曰くが有るのであらうと想像するものが多いやうだが、内容を洗つて見ると決して見棄てたものでもない。配當はと云へば營業開始以來缺かさず五分で、營業の狀態はと申せば既に江戸川の難工事も完成して鴻の臺に達し、參詣者の多い帝釋天への分岐線も竣工して、相當の客は引いて居る。一方の兼營事業たる電燈も、其の供給電力が百五十萬馬力で一萬三千五百燈と云へば滿更馬鹿にしたものでもない。左程目覺しい發展はしないとしても、五分の配當は今後も保證が附けられやう。

東京灣汽船株式會社

『あかち』一派の專有物で、株全體が渡邊一家の同族のものであるから、浮動株などは皆無である。一割から一割二分位の好配當で成績は何時も良好であるが、他人が手出しの出來る株でもないから、詳しく註釋を附ける必要もあるまい。

株式會社東京石川島造船所

確實な好利廻りを見ようとして放資するに適はしい株である。明治二十二年の設立で、資本金は百〇二萬圓と云ふ半端な勘定、一株五十圓の全額拂込で二萬四百株である。日清戰後海運界の勃興に際し、前後二回資本金を百五十萬圓に增加して船渠や造船機關の完成を圖つたが、營業の成績は案外に面白くない。爲めに三十五年には浦賀の分工場を賣り飛ばし、資本金を一時三十六萬圓に減じて大整理を斷行し、鐵工所主義を本位として營業をやつて見ると案外に好成績で、其後資本を現在の如くに增資し、引續き依然として一割配當を續けて居

る。

內國通運株式會社

江戸の飛脚時代からの古い暖簾で、會社としての設立は明治五年の六月、資本金は百二十五萬圓の內拂込が九十三萬七千五百圓、舊株五十圓の拂込濟が一萬二千五百株、新株二十五圓の拂込が一萬二千五百株である。積立金が四十五萬九千圓、借入金が二十七萬五千圓、配當年一割二分と云ふのが會社最近の狀態である。其の營業振の堅いので通つて來たのは結構だが、松谷天一坊氏が會社の乘取策を講じて以來、兎角に重役間に紛擾の多いのが球に疵と云ひたい。デモ過般松谷氏は隱退したやうな形となり、重役間の內紛も怎うやら妥協が出來たと云ふのが、若しも眞實ならば結構だ。何と云つても堅い會社であるから、矢張り石橋主義で健實に好成績を擧ぐるやう努力するが可いであらう。

利根運河株式會社

設立は明治三十三年の三月で、資本金は四十萬圓の拂込濟、配當は年三分で、一株五十圓の株式市價が二十圓と來てはトント手も出せず、内容を説明するのも氣の毒で叶はない。

横濱船渠株式會社

船舶及び船舶に要する諸機械類の製造修繕を目的とする會社であるから、海運界の好況なる今日、其の成績の悪からう筈はない。果せる哉、近く造船所新設の計劃などもあつて、遠からず增資擴張となる可き段取であるさうな。設立は明治二十四年の六月、資本金は三百七十五萬圓の内拂込が二百四十七萬五千圓、額面五十圓の三十三圓拂込である。營業の蓋を開けたのが三十八年の八月で、爾來順風に帆を揚げつゝ日露戰爭後には配當一割五分てふ素晴しい景氣も出たが、其後一般財界不況の影響を受けて一割二分となり、更に九分に減じて今日に到つたのである。而も前記の如く海運界の好況てふ順風に棹さして、今では株主から前途の發展を期待されつゝある。最近郵船會社が買收するやうな噂を

孕んだ例もあるが、之れは恐らく事實ではあるまい。併し同社の重役中には近藤郵船社長の令息などもあつて、社の勢力がヂリ〳〵と郵船系統に移りつゝあるの事實は之れを否むことが出來ない。

株式會社新潟鐵工所

此の頃、三十圓拂込の此の株が一日にして俄然十圓の奔騰を告げ、一躍六十七圓と云ふ市價を出した事に依つて、忽ちに市場の注目する所となつたのであるが、其れまでは餘り知られては居なかつたらしい。此の會社は元日本石油の副業のやうな關係にあつたのを、明治四十三年に分離して、資本金二百萬圓の四萬株、一株三十圓の拂込で一本立ちの株式會社となつたのである。既に其の生立ちが斯くの如くであるが故に、株主は殆んど全部日石畑の人で、即ち日石會社が六千株の株主たるを筆頭に、同じく重役連の持株が〆て七八千株とあるからには、浮動株が如何に少いかは以て想像し得らるゝであらう。其の事業も先づ日本石油のものが主で、次には鐵道院の御用を却々澤山に仰せ附かつて居る。

卽ち當鐵工所は鐵道院の指定工場の一であるから此の方面にも却々うまい仕事がある。又近くは東京出張所で盛んに石油發動機を製作して、其の製品の供給地は北は樺太から南は臺灣にまで及んで居る。昨年來鐵材料の暴騰で尠からざる打擊を受けたが、而も尙ほ配當は九分で將來尙ほ大いに發展す可き會社である。唯だ浮動株が尠い關係から、若し日石側の人が一寸耳打ちでもすればトンダ芝居の打てる株だと云ふ事丈けを承知で思惑をせねばならぬ。

横濱正金銀行

生年月から云ふと日本銀行よりかも二つの年上で、創立は明治十三年の二月である。營業の區域から云ふならば世界を股にかけて居る譯で、誠に我が帝國を代表せる世界的銀行とも云ふ可きである。資本金は四千八百萬圓の內拂込が三千萬圓、額面百圓拂込濟の舊株が二十四萬株、二十五圓拂込の新株が二十四萬株と云ふ勘定になる。最近の決算報告に依るに積立金が二千餘萬圓、後期繰越が百三十餘萬圓、年一割二分の配當とある。而して政府からは一千五百萬圓をつて年二朱の低利で資金を融通して貰ふ特權を與へられて居るし、更に滿洲及び淸國に於ては兌換劵を發行するの特權をも得て居るので、此の銀行に對して其の基礎がどうの斯うのと云ふ必要は更にない。

日本興業銀行

日本銀行に次ぐの特殊銀行でありながら振はざること甚だしい。諸株の一列一體に暴騰した昨今でも、五十圓拂込が漸く五十七八圓は稍々心細い感がある。但し其處が特殊會社たるの有難さで、目下行內の掃除中でもあり旁々、其の內には滿更面白い事のないものでもあるまいと、前途を樂しむ人達も尠くない樣子に承る。設立は明治三十五年の三月、資本金は千七百五十萬圓の拂込濟、額面五十圓の三十五萬株、最近の配當は年六分五厘である。御商賣はと云へば彼の勸業銀行が不動產抵當で低利長期の貸附を目的とするやうに、當行は各種證劵株劵の低利貸附、應募、引受けなんど株劵證劵に關する業務が本來の目的で、併せて工業の發達を助成する爲めに工場の不動產抵當にも手を染めて居る。

何しろ御商賣柄大分怪しい株券を背負ひ込んだ事が聲價を落した所以らしいが、前述の如く目下着々清潔法を實施して居る事でもあるから、將來の惡くない事は確かであらう。

東京信託株式會社

其の名の示すが如く信託業が本來の目的であつて、試みに營業種目を列記して見ると、土地建物の管理、土木建築の設計及監督、土地建物の賣買、代理及び紹介、金品の貸附となつて居る。設立は明治三十九年の五月、資本金は百五十萬圓の内拂込が百五萬圓、一株五十圓額面の内拂込が三十五圓、最近の配當は年八分、株式の市價は三十五圓拂込が二十二三圓である。以て略其の内容を察する事が出來やう。

横濱火災（海上運送信用）保險株式會社

思ひ切つて戒名の長い會社であるが、通稱を横濱火災で通つて居る。設立は明治三十年の十月、資本金は五百萬圓の内拂込が百二十五萬圓、一株額面五十圓の拂込が十二圓五十錢、決算期は毎年五月で年一回、最近の考課狀に依るに五十四萬圓の積立金があつて、年一割三分の配當であるから成績は立派なものだ。其の名の示すが如く火災と、海上と、運送と、信用との保險であるが何れも順當に伸びて居る。株式市價は十二圓五十錢拂込が三十二三圓であるから馬鹿に景氣が可い譯である。

東京火災保險株式會社

浪花節の文句ではないが一歩は高く一歩は低く、其の成績は實に一高一低、兎角に盛衰を免れないが、最近の配當は年八分がレコードである。明治二十年七月の設立で、資本金は一千萬圓の内拂込が二百五十萬圓、一株額面五十圓の内十二圓五十錢の拂込である。火災保險とは云ひ條、近來は海上及び運送の保險にも手を染めて居る。

共同火災保險株式會社

表看板は火災保險であるが、海上もやれば運送もやり傷害もやる。内で火災、海上、運送の三者は相當の成績を收めて居るが、傷害保險の方はお話しにならない。之れは他に粟津博士の傷害保險が專門に活動して居るのと、デなくとも未だ世人から事業の性質を認められぬが爲めであらうと信ぜらるゝ。明治三十九年六月の設立で、資本金は五百萬圓の内拂込が百二十五萬圓、五十圓額面の十二圓五十錢拂込で、十萬株と云ふ計算になる。配當は大正元年の一割が峠で、爾來六分に減じて居る。

北海道炭礦汽船株式會社

今では株の大半が三井系に歸して、他の株主は口出しが出來ないやうになつて居る。併し斯うなるまでには大分紛糾を極めたもので、總會は何時も蜂の巣へ石を拋つたやうな騒ぎを演ずのが常であつた。創立は明治二十二年の十一月であるが、四十二年頃から愈々不況のドン底に陷つて、無配當はまだしも、損失の繰り越しとあつては株主も素直に默つて許りも居られず、ツイ騒いで見たくもなつて前記のやうな大混亂を演じたのであつたが餘り埒が明かない。遂に會社も株主からお念佛の一つ宛も唱へて貰つて息を引き取らうとした程であつたが、物窮すれば必ず通ずるの道理に洩れず、大正二年の下半期に大改革の斧を揮つて資本金九百萬圓を切り捨て、現在では資本金二千七百萬圓の内拂込が二千二百五十萬圓、額面五十圓拂込濟の普通株が三十六萬株、額面五十圓の内二十五圓拂込の優先株が十八萬株となつた。斯くて專念革新に努めた結果、最近の配當は普通株が二分、優先株が七分五厘となつて、更に此の社の出店格にある日本製鋼所が、歐洲動亂の爲めに景氣が可いやうな譯から延いては當社へも好影響を及ぼして、社業の前途は大いに樂觀するに足る。先づ當分配當は薄いにしても、五十圓の市價が五十圓に恢復するの日も餘り遠くはあるまいから、市價三十八九圓の同株には大いに樂しみがある譯である。

九州炭礦汽船株式會社

明治四十年の創立である。時は將に日露戰後の黃金時代とあつて誰れ彼れの差別もなく色々の會社を押し立てる時代に、田健次郎男委員長として生れた會社である。資本金は五百萬圓の二百五十萬圓拂込、一株五十圓額面の二十五圓拂込である。創立當初は華々しいものであつたが、炭礦と云へば兎角に難かしい事業と見えて業況は常に不振勝である。四十五年の上半期に七分の配當をしたのが前後無類の好配當のレコードで、一時は株式市價が八九圓に低落して社內には內紛が起ると云ふ騷ぎに今にも息を引き取りさうであつたが、三菱が五十萬圓の資金を融通したので辛うじて息を吹き返し、爾來社運隆々とは行かずとも、兎に角、年五朱の配當を續けて居る。最近の考課狀を見ると積立金が八萬八千五百圓、借入金が百八十四萬圓、後期繰越金が二萬六千四百圓となつて居て、今後どの位發展の餘地があるものか、門外漢にはチト分り難いが、營業の狀態は漸く順調に進んで來て、今期(大正五年上半期)は幾分の增配を爲し得るであらうと噂されて居る。

石狩石炭株式會社

明治三十九年の創立で、資本金は三百七十五萬圓、內拂込が三百萬圓、五十圓額面の四十圓拂込である。炭質は良好だと云はれて居るが兎角成績が上らない。おまけに先年例の坑道大爆發の爲めに多數の人命を失つたやうな椿事もあつて、株式市場の人氣は沈み勝であつたが、今度三井の手に歸したから、將來は相當の成績を擧げ得るであらうと信ぜらるゝ。三井が炭礦に着目したのは可なり前からの事で、ツイ隣接せる北海炭礦が三井系のものとなつて以來、三井は競爭の弊に堪へないので石狩炭礦併合の謀を廻らし、澁澤男を仲介として社長たる淺野總一郎氏の持株四萬株四十圓拂込のものを五十圓で買受けたるを手始めに、同じ條件で合計七萬五千株を手中に收め、大正五年一月の總會で全部重役の入れ替を行ひ、三井系の顏振をヅラリと陳列して改革は玆に一段落を告げたのである。其の日の總會では一分減の四分配當を可決したが、此の改革に依つ

て同社は將來大いに有望となつて來た譯である。

入山採炭株式會社

明治三十八年五月の創立で、資本金は漸く一百萬圓、内拂込が八十七萬五千圓で、五十圓拂込濟の舊株が一萬五千株、二十五圓拂込の新株が五千株とあつて、會社としては決して大きなものではないが、其の内容に到つては如何な大會社も跳足と云つた風で、大正三年の下半期には創業二十年の紀念として五割の配當を爲し、更に使用人の慰勞金として金八萬圓を支出して、半端な人足までが其の恩惠に浴した程であつた。以來配當は二割がレコードで、百萬圓の會社でありながら百三十餘萬圓の積立金があるなどは少しく結構過ぎるやうだ。

横濱倉庫株式會社

明治三十九年九月の設立で、資本金は三百八十萬圓の内拂込が百七十四萬八千圓、一株額面五十圓の内二十三圓拂込である。配當が年二分二厘と來ては甚だ

貧弱なものだが前途には望みがないでもない。當社の事業と云ふのは其の名の示すが如く倉庫業ではあるが、一面には又土地の埋立を目的として居るのであるから、發展の目覺しい横濱港の計劃としては甚だ望みがあるので、果然、一時は株式市場の花形株と成つたのであつたが、此の種の事業は相當の成績を擧げる迄には、其れ丈けの日數を要するものと定つて居るのに、株主は其の辛抱が出來ない。有望だ〳〵と前觸れ許り大きくつて、二分や三分の配當ではと投げる人も尠くないので、今では二十三圓拂込の市價が十七八圓てふ憐れを止めて、而も却々に芽を吹きさうにも見えないが、ヂリ〳〵と發展するには相違ない。

大東鑛業株式會社

謎のやうな會社である。配當が普通年一割、優先が年一割二分、志岐、池島、母子島に炭礦を所有して、今採掘して居るのは第一坑丈けであるが、若し第二坑に手を附ければ大變な出炭量だと會社側では大きく吹く。而して炭質は上等

の無煙炭で、おまけに宮內省御用の金箔まで附けてあるが、株式市價は五十圓拂込が高々三十圓で、ツイ一昨年邊りは十圓など云ふ滑稽な相場もあつた。之れでは何處かに陷し穽でも有りさうに思へて一寸手が出ない。設立は大正元年の十一月、資本金は二百二十四萬圓の內拂込が百七十萬圓、株數は五十圓拂込濟の普通株が二萬四千株、二十五圓拂込の優先株が二萬株、併せて四萬四千株である。

東京建物株式會社

配當は年九分で、會社の內容も惡い樣子はないが、餘り氣乘のせぬ株である。デモ昨今の市價は五十圓拂込が五十五六圓とあれば、此の種の株としては出來の惡い方でもあるまい。設立は明治廿九年の十月、資本金は五百萬圓の內拂込が三百八十萬圓、株數は五十圓拂込濟の舊が二萬株に、三十五圓拂込の新が八萬株である。營業は建築の請負に家主に金貸しで隨分手廣くやつて居るらしい。

東洋拓殖株式會社

法律第六十三號に準據して設立されたものであつて、其の特殊會社たるの點に於て南滿鐵道と酷似して居る。而して南滿鐵道は滿洲を背景とし、東拓は朝鮮を背景としての會社の經營に任じて居るが、事業の性質が異なるが爲めに東拓は南滿に比して甚だ派手でない。卽ち東拓の事業と云ふのは政府の提供に係る田畑五千七百町歩を開拓する爲めに、內地より農民の移住を促して貸附金を爲し、小作收入を圖ると云ふのであるから甚だ地味な仕事である。設立は明治四十一年の十二月、資本金は一千萬圓の全額拂込濟で、一株の額面は五十圓である。其の成績は先づ以て良好であつて、配當は四十三年が六分、四十四五の兩年が六分五厘、大正二年には七分まで伸したのであつたが、翌三年度には米價暴落の打擊を受け、六分五厘に減少して今日に至つたのである。何しろ政府の特別保護の下に成長しつゝある會社であるから、其の確實なるは勿論、社業の前途も亦大いに樂觀す可きものあるは論を俟たない。

京城瓦斯電氣株式會社

元日韓瓦斯電氣會社で通つて居たのであつたが、朝鮮始政五週年祝典擧行の際に標題のやうに改名したのである。設立は明治四十一年の十月、資本金は六百萬圓の內拂込が五十萬圓、五十圓拂込濟の舊株が六萬株、三十五圓拂込の新株が六萬株である。借入金が百六十萬圓で積立は十七萬餘圓、後期の繰越は唯お義理に計上してある丈で萬にも足らない。配當は年九分からジリ〳〵下つて今では六分であるから、一寸聞くとお可笑いやうではあるが、左樣に社業が振はない譯ではない。配當を減じて來たのは或る意味に於ては寧ろ內容の健實になりつゝあるのを證明するもので、事業の方も朝鮮其ものゝ發展に伴つて、漸進的に伸びつゝあるものと觀測して差支ない。

北海道瓦斯株式會社

東京瓦斯重役一派に依つて明治四十四年の六月に設立されたるものである。北海道の各區に亙つて瓦斯を供給するのが目的で、目下の營業は札幌、小樽、函館の三區に在る。大正元年九月の開業で、夫れ以來順調に育つた方で、配當は七分であるから惡い方ではないが、株式の市價は二十圓拂込が十二三圓とあつては情ない。併し北海道では全く獨占の事業で、且つ冬季の長い所で寒い土地であるから瓦斯の需要も多く、追つては北海全道に手を擴げる筈であると云へば、前途には望みがあるに相違ない。資本金は三百萬圓の內拂込が百二十萬圓。

廣島瓦斯株式會社

兎角忘られ勝ではあるが馬鹿にした株でない。資本金は三百萬圓の內拂込が百十七萬圓、二十三圓拂込の舊が四萬株に、十二圓半拂込の新が二萬株である。本社は廣島に在つて、其の供給區域は廣島、尾の道吳の三市に跨り、此の勢力範圍丈けは全く獨占の姿にある。分けても廣島市では第五師團、各聯隊を首めとして、陸軍糧秣廠、被服廠、吳市に於ては海軍工廠など云ふ大きな得意を有つて居るので、餘り急りもせずに八分五厘の配當をして居る程で、全國の瓦斯

會社は水力電氣に壓倒されて青い息を吐いて居るのに、此の會社丈けは泰平の夢を貪つて居る。

横濱電氣株式會社

横濱ものと云ふので株式市場では兎角に閑却され勝であるが頗る有望な株である。明治二十三年十月の創立で資本金は七百五十萬圓、内五百三十五萬圓の拂込である。舊株が五十圓拂込濟で六萬四千株、新株が二十五圓拂込で八萬六千株と云ふ事になる。創立以來順風に帆を揚げて來た會社で、明治四十一年頃には一割五分の配當を維持して居たが、其の後資本金を增加して以來配當率が減少して、今では一割一分を常例として居る。此の社の電力には常に剩餘がある ので、今度新たに化學工業を兼營しようかと云ふ新計畫もあるらしい。併し一方には、化學工業は別働隊として新會社を起して其處へ電力を賣るが可からうてふ説もあるらしいが、單に電力を賣つた丈けでも會社の收入は著しく增加する譯で、同株は投資の目的物としても前途に望みのある株である。

神戸電氣株式會社

元神戸電燈と神戸電鐵との寄合世帶、現代の若い人達ならば謂ふ所の共同生活と云つた格で、新會社の設立を見たのが大正二年の五月、資本金は千四百八十五萬二千圓で内拂込が千二百一萬八千圓、五十圓拂込濟の舊株が十八萬五千四十株、三十三圓拂込の第一新株が五萬二千株、十七圓五十錢拂込の第二新株が六萬株と云ふ勘定になる。配當は六分から七分、七分から七分五厘と伸して、一部の人達は同社の前途を樂觀しては居るが、何しろまだ會社の内容が充實して居らない。千五百萬圓近くの大會社でありながら、タッタ五萬圓の繰越も心細ければ、十一萬の積立で二百二十餘萬圓の社債借入金も情けないやうな心地がする。要するに前途は疑問の裡にあつて、今後順當に伸した所が株に信用の附くまでには、前途尙ほ遼遠の觀がある。

朝鮮瓦斯電氣株式會社

明治四十三年十月の創立で資本金は三百萬圓の内拂込が百三十五萬圓、一株額面五十圓の二十二圓五十錢拂込である。豫定の計畫が豫定通りに完成したなら相當の收益もあるのであらうが、何しろ豫定の計畫を遂行するには株金の拂込をせねばならぬ。併し拂込を命ずれば株主がブツ〳〵云ふと云ふ有樣で、振はざること久しきに及んだが、大正四年下半期の收入は輕鐵に於て稍々意に滿たざりしのみ、他は何れも優良の成績を收めて、電鐵の收入も相當の額に上り、總收入が十一萬餘圓、内六萬六千餘圓を支出して殘り四萬三千餘圓の純益を見たのであるから、前期に比しては三萬餘圓の增收である。更に同社の一大福音とも云ふ可きは、先頃株式募集を發表したる朝鮮輕鐵が、當社の既得權を四十萬圓で買收するの一事であるが、若し其の實現を見るに於ては、朝鮮瓦斯は見事に社債を整理して尙餘りあるので、同株昨今の商狀が比較的穩健に進みつゝあるのも全く之れが爲めである。

函館水力電氣株式會社

北海道の函館市に本社を構へて電燈及び電力の供給、電氣軌道の經營をやつて居る。資本金は二百七萬五千圓の内拂込が百三十二萬五千圓、最近の配當は年一割で、株式の市價は五十圓拂込の親が五十三圓、十七圓半拂込の新が二十圓であるから、以て會社の内容の堅實なるを窺ふ事が出來やう。重役の顏振を見ると中野武營氏、園田實德氏、牟田口元學氏なんどのお歷々で堅固に固めて居る。

帝國電燈株式會社

其麼電燈會社がありますか、などゝ交ぜつ返しては可けない。實際に存在して居ればこそ市場にも上るのである。資本金は確か二百萬圓、一株五十圓の二十五圓拂込で、配當は年八分とある。全國内地の小都市に電燈を點けたり、又は電燈の創設を請負つたりするのが本業であるが、何しろさうトビ〳〵に散らして置いたのでは第一事業の統一が困難で、相當の成績を擧げやうと云ふのは難しいやうに想像される。兎に角に、創設後まだ夫れ程の年數を食つては居らず、

投資株としての資格も充分でないやうな譯であるから、取引は到つて尠いが、配當が八分で株式の市價が二十五圓拂込の二十七八圓は上等の部類だ。

宇治川電氣株式會社

設立は明治三十九年の十月、資本金は最近まで千二百五十萬圓の全額拂込濟であつたが、大正五年三月に増資して二千五百萬圓となつた。近江の琵琶湖の水を利用して三萬基の電力を起して、京都大阪方面へ送電すると云ふ關西唯一の水電事業であるが、驚く勿れ其工費は一千七百九十萬圓とあつて、當時の資本金を超過すること實に五百萬圓、而して未だに以て七百五十萬圓の社債を脊負つて居る。其の資産の狀態から觀ると、何となく不安の影を伴ふやうにも受取れるが、社長は財界の大立物たる中橋德五郎氏で、專務も一寸腕利きの村木正憲氏とあつて、何の心配もなく持ち耐へて、配當も大正五年上半期が八分、同下半期が八分五厘、來六年上半期が九分で、漸次一割二分迄増配の見込確實であると云へば、先づ順調に進みつゝあるものと觀測して差支あるまい。

名古屋電燈株式會社

中京の獨占的事業とあるからには先づ以て成績の惡からう筈はない。設立は明治二十年末の押し詰つた十二月、資本金は一千六百萬圓の内拂込が千六十三萬七千五百圓、五十圓拂込濟の舊株が十五萬五千株、十七圓五十錢拂込の新株が十六萬五千株、配當は年八分五厘である。同社の歴史を調べて見ると最初は案外に好配當を持續し得たので、明治四十年頃までは毎期一割四分であつたのに、其後に出現した競爭會社を買收して、中京に於ける獨占權を維持する爲めに資本を増加して以來、自然配當減の餘儀なき場合となつて、四十四年の下半期まで一割二分、而して更に一方では一大水力發電工事を開始して、之れに巨額の資本を投ずるに至つて再び配當減を餘儀なくせられ、四十五年の上半期から大正二年上半期までが九分の配當で、更に同年下半期には七分六厘に落ちたが、今では前記の如く八分五厘に恢復して居る。何れかと云へば將來樂しみの多い會社で、現時の資産には聊か批難す可き點もない。

東京電氣株式會社

一寸名前を聞かされた丈けでは電燈會社と履き違ひられさうな會社であるが、其の實は電球の製造販賣と硝子磁器の製造とを營む會社で、設立は明治二十九年の四月、資本金は三百六十萬圓の內拂込が二百六十萬圓、五十圓拂込濟の舊株が三萬二千株で、二十五圓拂込の新株が四萬株である。株主の大半は米國人で、謂はゞ日米の合同事業であるから會社の經營振からしてバタ臭い感じはあるが、流石に他の範とするに足る程で、且つ成績も極めて良好とあつて、配當は毎期確實に二割を續行し、積立金の如きは先年新株の拂込に百萬圓を振り向けて、尙且つ五十七萬五千餘圓を擁して居る程であれば、固定資本の償却なども遺憾なく行はれて居る。おまけに近時盛んに使用さるゝに至つたタン.グステン電球は當社の特許品であるし、其外窒素電球に電氣メートルなんど色々と新事業の計畫もあつて、社業の前途には希望の光明が輝いて居るとあつては、株式市價の惡からう筈はなく、五十圓拂込が百三四十圓にまで伸して居る。大きい會社ではないが素晴しい景氣の會社である。

利根發電株式會社

素晴しい勢ひで擴張の手を延べつゝあるのは此の會社だ。本社は群馬縣の前橋市に在つて、其の事業は電燈電力の販賣、電氣軌道の經營が本來の目的であるが、一昨年前橋瓦斯會社と併合して以來、瓦斯事業をも兼營するに至つた。而して電燈及び電力の供給區域は、先づ本社所在地の群馬縣一圓を根城と爲し、埼玉、栃木の一部を征服し、更に東京にまで手を擴げつゝある。會社の設立は明治四十三年の五月で、資本金は六百十萬圓の內拂込が四百十六萬七千五百圓、額面五十圓拂込濟の舊株が四萬四千七百株で、二十五圓拂込の新株が七萬七千三百株である。最近の配當は年九分、借入金が三百五十萬圓あつて、積立金は漸く八萬四千圓、繰越が僅かに二萬五千圓と云ふ狀態であるが、會社側の言明する所に依ると今後配當は增すとも減ずることはないとある。併し借入金の利子丈けでも年三十萬圓近くを必要とするのであるから、之れ丈けでも却々の重

荷である。株式の市價は漸く額面を拔いて居るに過ぎないが、決して馬鹿にした株ではなく、唯だ前途尙大なる奮鬪を必要とするのは事實である。

鬼怒川水力電氣株式會社

日光山北麓の黑部から九哩のトンネルを誘ひ來つた水を、大瀧の發電所で何千尺の高所から急轉直下させて電力を起し、更に遠く七十五哩を距る東京市へ電力を供給して、電車を動かしたり、電燈を點けたりするのは確かに面白い事業に相違ないが、唯だ面白い丈けで算盤が持てないやうな仕事では張合がない。此の會社の株なども五十圓拂込濟が二十七八圓の市價であるのは一つには事業の壯大である割合に算盤が持てない爲めであらう乎。明治四十三年十月の設立で、昨年の上半期まではまだ四十二圓五十錢の拂込であつたのを同年の下半期に全部拂込濟としたのである。所が此の拂込が社債整理の爲めの拂込で、將來の收益增加の爲めに用ひた譯でないから、會社としては拂込の爲めに配當金が增す丈け不利益になるので、偖こそ前期の株主總會で七分配當を五分配當に制限し、社礎の確立を圖つたのであるが、今期(大正五年上半期)に入つてからの營業成績は甚だ順當に進んで、市電に對しては契約電量六千五百五十キロの外に更に千八百キロの追加契約を爲し、其他小口の需要も段々と增加して、通計一日三十萬キロの供給を爲すの運びとなり、怎うやら芽を吹きかゝつた矢先、突如隧道の崩壞てふ一大不幸事が湧いて出るなどは全く同情に堪へぬ次第だ。之れでは株式市價の恢復は先づ當分見込が立つまい。

猪苗代水力電氣株式會社

工業界の進步の顯著なる今日、其の原動力たる電力の需要が激增するのは固よりで、此の社なども事業は順調に伸しつゝある。明治四十四年十月の創立で、資本金は二千百萬圓の内拂込が九百四十五萬圓、一株額面五十圓の内二十二圓五十錢の拂込、配當は年五分であるが、事業の好況と共に增配を孕みつゝあるのは結構な事である。當社の事業は其の名の如く猪苗代の湖水を利用して電力を起し、之れを六十里先きの東京へ送電し、其の電力を東京電燈、王子電氣軌

道、東京化學工業會社、高田商會、鬼怒川水電、新潟水電なんどへ供給して居るので、第一期計畫の發電能力は今や殆んど全部賣約濟とあつて、目下第二期の工事に着手して居る位であるから、社の前途は勿論有望と觀測して間違ひない。

桂川電力株式會社

設立は明治四十三年の九月、資本金は八百萬圓の內拂込が五百六十萬圓、一株額面五十圓の內三十五圓の拂込で十六萬株である。發電所は甲州南都留郡の東桂村に在つて、最初は日本電燈を唯一のお得意として居たのであつたが、其營業狀態を怪しと見るや、忽ちに他へ需要を求めて、日本電燈の外に、京濱電車日本鋼管、淺野セメント、外數ケ所の工業會社へ小口に販賣するなど却々に拔け目がない。斯うした遣り口であるから、鬼怒川、猪苗代、富士、利根なんどの各水力電氣が入り亂れての混戰地たる東京市に在つても、格別怯へもせずに順調に發達して、配當は八分となり九分となり一割となつて、株式の市價も三十五圓拂込が五十圓以上にある。何しろ安田系に屬する會社である丈けに萬事が地味で堅い一方で、配當なども此の邊を峠として停電させて置くらしいとあつては、持株としては極めて安心であつても、思惑株としては興味が尠い譯である。

日英水電株式會社

朝顏日記で名高い大井川の上流に發電所を置いて、更に濱松の火力發電所が力を添へつゝ、濱松を中心に彼の邊一帶の各驛に供給する電力が約三千馬力、電燈の數にすると約五萬個となる。設立は明治四十四年の二月、資本金は三百萬圓の內拂込が百九十二萬、五十圓拂込の新株が三萬六千、株主の配當は營業開始當時の五分から伸して、今では年九分の拂込濟の舊株が二萬四千で、二十圓拂込の好況を示して居る。何しろ設立以來未だ多くの日數を算しても居らず、且つ巴川水力電氣工事の如きも完成せぬ狀態にあるのに、尙且つ九分の配當を爲し得るを想へば前途の有望なるは論を俟たない。

富士水力電氣株式會社

設立は明治四十年の十一月、資本金は三百萬圓の内拂込が九十萬圓、總株數六萬株、最近の配當は一割二分で、株式の市價は十五圓拂込が二十四五圓とあつて却々に景氣が可い。取締役會長は財界一方の大立物たる小野金六氏で、專務は白井新太郎氏である。

九州水力電氣株式會社

九州電氣界の大親分、資本金も千百五十萬圓てふ地方での大會社、重役は土地で第一流の富豪實業家の顏揃ひ、配當が六分五厘とあれば如何にも堅實らしい會社で、投資者が身振ひして飛び附きさうな株に思へるが、實際の人氣は甚だ厚くない。然らば何處に缺點があるかと云ふに格別其れと事を荒立てる程の穴がある譯でもないが、水電工事にドシ〳〵資本を注ぎ込んで、結局資金の固定し過ぎる傾きがある所へ、搗てゝ加へて株主大事の主義が手傳つて、兎角配當

にも無理があるとの噂が投資者の人氣を追ひ拂つた譯であらう。

東京瓦斯電氣工業株式會社

設立は明治四十三年の八月、資本金は百萬圓の内拂込が四十萬圓、總株數は二萬株、最近の配當は年八分、株式の市價は二十圓拂込が三十圓で景氣の可い方である。社長は新進氣鋭の實業家として知られたる松方五郎氏で、株主の主なるものは林博太郎伯の千七百四十株を筆頭に、松方五郎氏の七百株、桑田銀行の千九十株などである。

名古屋瓦斯株式會社

先づ以て無難に伸びて來た會社である。設立は明治三十九年の十一月、資本金は四百萬圓の内拂込が三百萬圓、株數は額面五十圓拂込濟の舊株が四萬株に、二十五圓拂込の新株が四萬株である。營業の蓋を開けたのが四十一年で、其の上半期の年四分配當に始まつて、次の下半期が八分と伸し、翌四十二年から大

正元年までに拂込をしては事業を擴張して行つて、其の間に配當も一割から一割二分と增して來たのであつたが、大正二年の上半期に資本金を現時の四百萬圓に倍加した爲めに、配當は減じて八分五厘となつて現時も同樣八分五厘である。同社の遣り口を見ると聊か遣り過ぎたやうな感じがないでもないが、近時中京の發展の目覺しく、市勢の著しく伸張しつゝある今日、瓦斯の需要も日一日と增加して行くのは當然の結果であつて、事業其ものゝ有望なるは改めて申す迄もなく、會社の内容にも格別暗い影の潜んで居る譯でもなく、其の經營方針にも左程批難す可きものなき上は、現在の配當八分五厘が更に減ずるやうな事はあるまいかと觀測される。

日本活動寫眞株式會社

新しい事業に困難の伴ひ易いのは止むを得ぬ次第で、日活なども事業其物の新しい丈けに兎角に經營が六ケしい樣子である。最初一千萬圓の資本でデカ〳〵に看板は上げて見たが、大正三年の下半期には資本金を百五十萬圓に、拂込額三百萬圓を百五十萬圓に切り下げて、マア〳〵一本立ちの出來る會社と云ふ事にはなつて居る。大正五年の四月に更に第四回の株金拂込を決行して、一株額面五十圓の四十圓の拂込となつた。最近の考課狀に依るに純益金は十一萬餘圓、配當年八分で、五萬圓を後期へ繰り越して居る。

富士製紙株式會社

富士製紙は本邦製紙界の重鎭である。其の規模の宏大なる點に於ては東洋第一と稱しても過言でない。而かも動もすれば株式市場の人氣を缺いて、其の市價が常に拂込以下に彷徨して居たのは一の不思議であつたが、歐洲動亂の影響は輸入紙の拂底となり、支那市場の需要增加となつて、株式市場に於ける製紙株の昂騰は實に目覺しく、富士製紙の如きも亦忽ちにして人氣株の一つと化して了つた。同社の設立は明治三十三年の一月、資本金は一千萬圓の内拂込が七百八十一萬圓、五十圓拂込濟の舊株が五萬四千株、三十五圓拂込の新株が十四萬六千株となる。最近（大正四年下半期）の營業成績を檢するに、近年稀に見るの

好成績で其の總益金は八十二萬五千圓の多きに達し、前期に比する時は實に二十六萬千餘圓の增收であつたが、之れを怎う處分したかと云へば、先づ機械建物其他に三十二萬五千圓を控除し、積立金や救濟基金なども相當に其の額を增して、株主の配當は普通が年九分の特別增配を年一分として、前期に比して僅かに一分を增したに過ぎない。之れは時局關係の諸株が增配々々でメートルを上げて居る折柄、却つて眞面目な側の同情を惹いた譯で、此の調子で行けば社礎の鞏固になるのは勿論、製紙業の前途の愈々益々有望なるの折柄、事業其のものも會社の營業方針も、共に大に强みを增した譯であつて雙手を擧げて歡迎せねばならぬ。唯だ今後同社の警戒を要するのは事業其物ではなくして、寧ろ同社專賣の重役の内紛であらう。

王子製紙株式會社

ツイ三四年前までは五十圓拂込の同株が三十七八圓の市價で而かも買物なしてふ人氣であつたが、ジリ〳〵と人氣を集注しつゝある矢先に紙價の大暴騰となつて一躍百四五十圓は素晴しいものだ。當社は明治五年の創立で本邦洋紙製造の先驅である。何しろ當時の新聞雜誌などは極めて幼稚なもので民間には洋紙の需要がない。唯だお役所で幾分か使用した位の所であるから、洋紙製造を業とする當社の如きも全くお話にならなかつた。所が日清、日露の二大戰役で操觚界出版界の一大革命となり、洋紙業者の活躍を促すに至つて、本社の如きも俄かに社運の隆昌を見たのである。最初の資本金は二十五萬圓であつたが、日露戰後には六百萬圓となり、現時は千二百萬圓の八百四十萬圓拂込で、舊株十二萬株は額面五十圓の拂込濟、新株十二萬株は額面五十圓の二十圓拂込である。大正四年七月に定款を改正して同下半期は七月より十一月に至る五ヶ月間を一期としたが、其の利益金は百二十三萬餘圓に上り、前期の五ヶ月に比して著しき增加である。之れはツマリ紙價暴騰の結果であるが、其の處分案の如きは極めて愼重の態度を取つて、先づ固定資產其他に五十三萬二千圓を控除し、三萬六千圓の法定積立金の外に更に二十萬圓を別途積立となし、配當は二分增しの一割二分に止め、十六萬八千圓を後期へ繰り越したのである。更に當期(大正

五年上半期)はヨリ以上増收の見込で、大阪の帝國製紙を買收するやら、紙料工場の擴張を圖るやら、丸で成金が血道を上げて騒ぐやうな素敵な景氣だ。今期の配當豫想は一割五分。

東京板紙株式會社

明治十九年十月の創立であるから數へ年の今年が三十六歳、人間ならば而立を越えた譯であつて會社としては相當に貫録が附いて居る。資本金は百五十萬圓で内拂込が百萬圓、舊株一萬は五十圓の拂込濟、新が二萬株で二十五圓の拂込である。當社は板紙及び印刷紙の製造を兼ね、開業以來餘り荒い波風にも揉まれずに、ノホンと育つて來たのであつて、王子製紙や富士製紙と丈競べをしたのでは其の規模の大小に於て固より及びさうにもないが、兩三年前までの成績は實は見事なものであつた。所が人生に波瀾の免れざると同樣、會社などでも豫期せざる難關が生ずるもので、昨年板紙の協定破裂以來、製造業者の捨賣的競爭となり、同業者中には倒産の悲運を見るもの相亞ぐの有樣となつて、當社の如きも勢ひ收益減となり、最近數年間一割を缺かなかつた株主配當も昨年の上半期には八分に減じたが、同年下半期には九分に恢復し、今年に入りては市價も引き締つて會社の採算には漸く餘裕を生ずるに至つた。多分今期(大正五年上半期)の配當は一割に盛り返すであらうかと豫想される。試みに其の財産狀態を見るに、拂込資本額百萬圓、諸準備金三十三萬圓に對し、借入金支拂手形四十九萬九千圓を負ふて居るが、原料、製品、半製品、他會社出資等で約二十七萬圓、其他現金や賣掛金が二十九萬圓と云ふ勘定であるから、借入金支拂手形と相殺して尚剩餘を生じ、結局は諸準備金と固定財産百三十二萬七千圓とで拂込資本の約二倍と云ふ事になる。以て其の基礎の安固なるを證するに足るであらう。

帝國製麻株式會社

安田家が株の大半を所有して居る一事を以てしても能く此の社の内容を察するに足るであらう。前身は近江、下野、大阪の三製麻會社の合併したもの、更

に之れに加ふるに北海道製麻を以てして、打つて一團となつた新會社は明治四十年の七月に設立されたもので、資本金は六百四十萬圓、內拂込が五百六十萬圓、額面五十圓拂込濟の舊株が六萬四千株、三十七圓五十錢拂込の新株が六萬四千株である。此の道では獨占的の地位を占めつゝある同社の事であれば、固より營業成績の惡からう筈はなく、昨年(大正四年)下半期の利益金は固定資產償却に前期以上を支出して、尙且つ四十五萬五千餘圓に達し、前期に比しては約三萬五千圓の增收とあつて、優に一分の增配を決行し得る筈であるのに、何しろ大株主が安田とあつては如何に好成績でも配當のレコードを破つての增配などは思ひも寄らず、依然として前期同樣一割二分はお堅い事だ。此の株が常に賣物薄の狀態にあつて、甚麼場合でも五十圓拂込が市價六十圓を割つた例なしと云ふのも亦理窟のない譯ではない。

日本製麻株式會社

大正五年の三月から新に定期建株にお仲間入りをした會社であるから、會社は小さくとも尠しく詳しく其の內容を吹聽して置く必要があらう。此の社の創立は大正三年の二月で、資本金は二百萬圓、一株額面五十圓の內二十五圓の拂込である。工場の建築に着手したのが三年の七月で、翌四年の七月から一部の運轉を開始し、同年下半期の決算に於て初めて三萬二千圓の利益を得て五分强の配當を爲し、其後各工場の漸く整頓した矢先へ、英佛露の各國から軍需品の注文が舞ひ込んで、今年(五年)の六七月頃までは既に約定濟となる。其麼調子で今期は七分乃至八分の好配當を豫期せられ、當事者の言に依れば一兩年にして帝國製麻同樣一割二分の配當が出來ると云ふ凄じい鼻息であるが、一部には又其麼景氣も要するに戰爭の終熄までゞあらうと、見縊つた悲觀說を唱ふる人もある。併し製麻の需要は日と共に益々多く、內地は勿論、支那南洋をも併せて華客に勘定し得る今日でもあれば、其の經營方法の宜しきを得るに於ては、如何に帝國製麻が官廳方面を獨占したる今日であつても、一つや二つの新會社が其の間に介在し得る餘地のない譯もあるまい。折角奮鬪を冀望する。

東京製綱株式會社

餘り評判にならない會社であるが、其の內容の立派な、而して儲けの多い會社としては他に多く類を見ざる所である。設立も明治二十四年とあつては會社中の古參株で、現時の資本金は三百萬圓の內拂込が二百十萬圓、一株額面五十圓拂込濟の舊株が三萬株で、二十圓拂込の新株が三萬株の併せて六萬株である。製綱業としては先づ獨占と云つた風で、原料麻は之れをマニラに仰ぎ、種々雜多の麻綱や綱索を製造し、主として軍艦汽船用として海軍省や各汽船會社を得意として居る。月島製綱所を合併して以來、現時の資本金に增したのであるが、配當は久しく二割を維持して變らなかつた。所が大正二年に三十七萬五千圓を株主に、十二萬五千圓を使用人に分配して、積立を五十萬圓に減じて此の方、配當は一割四分に減じたが、之れは其れ以上の配當が不可能な爲めではなく、目下尙盛んに社內の保留額を增しつゝあるからである。されば株式の市價の惡からう筈もなく、五十圓拂込の親が百十四五圓、二十圓拂込の新が五十五六圓とある。

日本皮革株式會社

市の思惑株としてよりも寧ろ確實なる放資株として見るに適はしい株である。資本金は二百五十萬圓、一株額面五十圓の全額拂込濟五萬株である。創立は明治四十年で、人間ならば學齡に達して間もない位の乳臭兒である可きだが、開業匆々から成績が良好で九分の配當を爲し、其の後一割の配當を續けて來たのであるから、新事業としては驚く可き成功と云はざるを得ない。其處へ歐洲動亂と云ふサンタクロースがやつて來て、軍需品の注文てふ幸運を授けて行く、爲めに一昨年の下半期には一割二分の配當をなし、更に一割五分の配當に上せて來たのである。而も此の增配は一方積立金や償却資金を十分に差引いた上の增配であるから、決して輕機勢の增配ではない。唯だ問題は戰爭後の業況如何と云ふ事であるが、假りに戰爭後に露國軍需品の注文がパッタリと杜絕えたとして、內地需要丈けの製造に從事するものとして見ると勿論多大の收益減とな

るには相違ないが、さりとて決して悲觀するの必要はない。何となれば其後内地に於ける皮革用具の需要は益々増加して、一方輸入は著しく減少して居るから、今後内地品丈けの注文を受けるとしても、年一割二分若しくは三分の配當は出來るであらう。結局歐洲戰亂を機會に社の基礎を鞏固にした丈けが儲けで、而も其の反動は極めて輕微であると見れば間違ひない。故を以て同株は恐らく戰後に於ても人氣株の一つに數へらるゝであらうと信ずる。

日本鋼管株式會社

歐洲動亂の好影響を受けて一躍花形株となつたものゝ一つである。鐵價暴騰、鐵製機械の愉入杜絶なんど、會社に取つては結構な風向きになつて來た矢先に、事業勃興の氣運は抑へ得可くもなく、同時に鐵製器具の需要も益々増加しやうと云ふ仕掛けになつて、社運は旭日の昇るやうな勢ひとある。斯くて大正四年下半期の總會に於いては二百萬圓の資本を五百萬圓に増資し、増資額の四分の一即ち七十五萬圓の拂込を了はつたのであるが、此の資金を以て從來の製鋼工場、製管工場、丸棒工場の外に、更に形鐵工場なるものを創設するの計畫で、此の工場が竣成すれば同社の製鐵能力は約一萬噸を増して四萬噸となる譯であるさうな。前期の配當は一割であつたが、次期には一割五分は確實であると云へば、創立後僅かに四ヶ年を經過せるのみの同社としては誠に大出來である。唯だ戰後此の好況を持續し得るか怎うかは少しく研究を要するが、其は恐らく杞憂に過ぎぬものではあるまい乎。

東京製絨株式會社

一時は運轉資金に窮して高利まで借りた會社であるが、整理後着々と成績を擧げて來た矢先、歐洲動亂と云ふビリケンがちよいと顔を出したお蔭で毛織物界の大活躍となり、昨秋に比する時は十割方の暴騰を見たるもありて、而も製絨用の原料はモスリン用のトップ程には暴騰せず、製品の種類に依つては支那毛を使用するの便宜もあり旁々原料と云ふ事には左程頭を痛めずに濟むやうな譯で同社も今期は大分風の吹き廻しが宜いやうな話である。試みに前期の利益計

算を如何と見るに、純益金は二十九萬四千圓であつて、內法定積立金、損失補塡積立金が各一萬五千圓、固定財產銷却が二萬五千圓、別途積立金十四萬圓、役員賞與金一萬五千圓、株主配當金七萬五千圓(年一割二分)、後期繰越金一萬八千圓と云ふ事になつて居るが、今期は更に一分の增配を爲し得るに相違ない。明治二十年七月の創立で當時の資本金は三十萬圓に過ぎなかつた。創立後の成績はどうかと云へば、二十五年迄は無配當を續けて其の上三萬八千圓の缺損となり、之てはならぬと二十六年に至つて資本金三萬五千圓を切り捨て、同時に同額の增資をして整理は一段落となつた。此の增資株が卽ち今日の舊株である。更に日淸、日露の二大戰役に際して多大の利益を收め、四十年の四月に資本金を二百萬圓、內拂込濟百二十五萬圓となし、同時に品川毛織會社を買收して一大會社となつたが、其後も財界不況の爲めに四十一年の下半期から四十五年上半期迄に會社の財政には大きな穴が出來て了つた。所で債權者たる川崎銀行が見ても居られず、大倉組とも相談の結果善後の策を講じ、重役が一大英斷を以て整理を斷行した結果、社務漸く整ひ、折柄の歐洲動亂で大いに芽を吹いて來たやうな譯である。

東洋毛織株式會社

東京毛織と云つては分らぬ人も、後藤毛織と云へばアゝ彼れかと頷く事が出來やう。當社が斯く改名したのは大正四年九月の總會に於てゞある。其の前身である後藤毛織會社なるものは、元後藤恕作氏の個人經營であつたのであるが、日露戰爭後の企業勃興時代に株式組織に直つたので、當初の資本金は百二十萬圓であつた。所が其後增資して、今では三百萬圓の內拂込が二百五十五萬圓、五十圓、拂込濟の舊株が二萬四千株に、三十七圓五十錢拂込の新株が三萬六千株と云ふ事になつた。後藤毛織と云へば市場でも人氣を集めた花形株であつたが、近來はトント顧みられない。何故に顧みられないかと詮索して見ると、其の理由とも云ふ可きは、曾て專務であつた後藤氏が失敗の歷史を有すること、株主の顏振が面白くない事、會社の內情が兎角明白を缺く事、株主の中に株式市場での腕利がある事などが主なる原因として列擧されて居るらしい。併し後

藤氏の引退して別に毛織會社を企劃して以來、當社も亦大いに覺る所があつて從來の積弊を一掃し、社內の大淸潔法を斷行して、配當の如きも四分減の六分とした程であるから、其の方針の生眞面目になつて來たことも窺はれるし、且つ毛織會社としては何といつても一流ドゴで、同社の製品たる毛布、ネル、セルの如きも常に市場に多きを占め、洋服地の如きも輸入品に劣らぬ優良品を產出し搗てゝ加へて近來は例の露國の大注文などもあつて、近き將來に於ては其の株式の大いに歡迎される時期が來るかも知れない。君子は危ふきに近よらずなど云ふ世評も、今日では最早同社から取り去られたものと見て宜からうか。

上毛モスリン株式會社

重役間の內紛、社長の放逐、次ぎが訴訟沙汰と、餘り面白くない事件が續々と發生して、兎角非難の中心たるが如き有樣であつたが、雨降つて何とやらの古い諺もある通り、お次ぎが大改革大整理と來て社運も次第に挽回し、暫くの無配當から五分配當まで漕ぎ附けたが、原料の缺乏は五割操業短縮協定率の生產すら續行出來ず、各社共に夫れ以下の操業に甘んぜねばならぬ仕儀となつて、今春(大正五年)來同社も漸く生產力の三割五分の機臺を運轉するに過ぎない。這麼調子では如何にモスリンの市價が昂騰したからとて、うまい話のあらう筈はなく、前期同樣五分の配當を續ける事が出來れば大出來と云はねばならぬ。會社の設立は明治三十五年の四月、資本金は四百萬圓の內拂込が二百八十萬圓、五十圓拂込濟の舊株が二萬株、三十圓拂込の新株が六萬株と云ふ勘定である。

東京モスリン紡績株式會社

モスリン會社としては手堅い方で、其の株は何時も賣物薄とあつて、株式市價は五十圓拂込が九十五六圓と云ふ景氣である。設立は明治二十九年の二月で、最初の資本金は百萬圓であつた。新しい事業としては順調に進んだ方で、九分乃至二割五分てふ好配當を續けて來たが、四十二年に資本金を二百萬圓に增して事業の擴張を劃策して居る矢先に財界不況てふシケを食つて、四十一年の下半期と四十三四年の兩年とは無配當の憐れを止めたが、此の難關を突破した後

は再び好況時代で、一割乃至一割三分の配當であつた。而して目下の配當は年一割である。今後も大した好景氣が出ぬかも知れぬが、さりとて不況時代にも逢遇せずして順調に進んで行くであらうと云ふのが一般の觀測である。

東京毛織物株式會社

明治三十九年十一月の設立であつて、事業の準備に取りかゝると間もなく財界の反動てふ海嘯を食つて、手もなく浚はれさうになつたが漸く踏みこたへて、兎も角も開業の運びとなる。ダガ暫らくは無配當で、大正元年の下半期、即ち創立後十三期目に漸く芽がふいて、始めて株主へ利益金を配當することが出來たのであつた。併し經營の方針が手堅いので、爾來毎期八分の配當をして、事業もジリ〳〵と伸して來る。社の基礎も漸く鞏固になる。其處へ露國から軍用絨の注文が來ると云ふウマイ仕掛けに、大正四年の上半期には一躍一割二分の好配當を決行し、同下半期の業態は稍々不振のやうに噂されたが、而かも依然として一割二分の配當を爲し、二十二萬餘圓を後期へ繰越して、大體に於て前期と大差なきの業況を示して居る。資本金は二百萬圓の内拂込が百六十萬圓、五十圓額面の四十圓拂込である。

東洋モスリン株式會社

日露戰後企業熱昂騰時代の產物とあつて、其の創立は明治四十年の一月、惡い形容かも知れぬが、年齡から云へば斯界での青二才である。現時の資本金は二百萬圓の内拂込が百六十萬圓、一株は四十圓の拂込である。創立後幾何もなくして逢着したる財界の不況に、人間ならば小供の時に其の生家が破產でもしたやうな形で、會社の發育は面白くなかつたが、四十二年の上半期に操業を開始し、翌年は五分と芽を吹いて、ヤレ〳〵と一息入れる間もなく次期は無配當の苦境に呻吟するやうな事になつた。併し天は堪へ難きの苦痛を與へぬものと見えて、幸にして關稅の改正となり、毛織物業者は一列一體に特典に浴するに至つて、四十四年の上半期にはメキ〳〵と伸して、大正二年の上まで配當はブツ通しの一割八分とメートルを上げ、當時三十圓拂込の市價が一躍して七十圓

買の好況を呈したが、其れも長くは續かず、財界は不況、生産は過剰となつて、大正三年には兩期とも再び缺損繰越の悲境に陷り、同四年の上半期には操業短縮の功果が現はれて六分の配當をなした。所が何分にも原料トッブの缺乏より機臺も漸く一部を運轉するやうな始末で、同下半期には再び無配當とある。ダガ不思議な事には同株に對する人氣は聊かも衰へず、戰後の活躍を見越すやら事業の有望やらで、四十圓拂込の市價が七十三四圓ドコに落ち附いて居る許りか常に賣物薄で買はうとすれば忽ちに市價の暴騰となるのも道理こそあれ、試みに株主名簿を繰り展げて見ると、其處には名代の若尾一家を筆頭に、あかぢ一派の人達なんど實業界の大立物がヅラリと顏を並べて居る。

東京キヤリコ製織株式會社

明治三十九年九月の創立とあれば、日露戰後に於ける事業勃興の潮流に棹して世に出た會社である事が分らう。東京モスリンとは姉妹會社で資本金が二百萬圓、一株額面五十圓の全額拂込濟で、株數は四萬株である。金巾、シーツの類を製織して輸入品を防遏しやうと云ふのが主なる目的で、偖其の經營者の顏揃ひは怎うかと云ふに、何れもモスリン業者や金巾業者のお歴々とあつて、新事業としては芽をふいた方であつたが、株主の配當は容易に出來ない。漸く大正元年に至つて六分の配當を爲し、其後年一割まで漕ぎ附けたが、三年以來財界の不況や支那市場の沈滯やらで、四年の上半期までは無配當を續けて來た。所が同年下半期には一躍八分の配當で、五十圓拂込の市價が突如八十圓の珍價を出すなどは、全く歐洲動亂てふ時局が咲かせた優曇華と云ふの外ない。

大日本麥酒株式會社

ビール大十錢、小五錢と云ふ立看板は、吾等が安洋食屋の店頭で常に目擊して居る所であるのに、其の十錢賣のコップが一杯一錢五厘に下落したと云へば嘘のやうであるが、事實昨年の秋十月頃、北海道邊では一杯一錢五厘が通り相場であつた。何故這麼珍現象が出たかと云へば、麥酒製造高の約八割以上が內地で消費せらるゝの關係上、不景氣の打擊を健かに被つて、搗てゝ加へての新進

會社の供給力激增が、全國に亙つて猛烈なる競爭の旋風を捲き起したからである。併し這麼競爭の最中にあつても何處を風が吹くかと云つた風に、前期以上の好成績を收めて、最近數年間のレコードたる一割四分の配當率を突破して、大正四年下半期に一分の增配で一割五分となし、其道の人達の度膽を拔いたなどの離れ業をやつて見せたのは、油斷も透きもない馬越社長と、石橋を叩いて渡る主義の植村專務とである。會社の生立ちを洗つて見ると、同社は去る明治三十九年エビス、アサヒ、サッポロ三會社の合同で成り立つたので、當初の資本金は五百六十萬圓、內拂込二百五十八萬五千圓であつたが、四十年一月に至つて東京新麥酒會社を買收して拂込資本額を四百十一萬圓に增加し、更に四十一年一月事業の擴張を策し、其資本を一千二百萬圓に增加して今日に到つたのである。昨年(大正四年)上半期の純益は七十萬三千餘圓であつたが、同下半期には約九萬圓の增收とあつて七十九萬二千餘圓の純益であつた。故に此增收額を以てするならば、優に二分餘の增配をなすことが出來たのに、一分增しの一割五分に止めて置いた所が奧床しい。泡沫を賣る會社としては蓋し畸形兒の類乎。

帝國麥酒株式會社

本社が門司にあつて西の方が勢力範圍であるから、東京邊では會社の存在さへも疑はれて居る。設立は明治四十五年、資本金二百萬圓の內百萬圓拂込、一株額面五十圓の二十五圓拂込である。創業以來暫らく無配當を續けて居たが、大正三年の上半期に始めて八朱の配當をして、以來今日まで八朱を續けて居る。後進の會社であつて年から云つてもまだ乳臭兒ではあるが、其の發展振は目覺しいものがあつて、前途は有望な會社として大いに囑目されて居る。

麒麟麥酒株式會社

大日本麥酒と云ふ强敵を向うへ廻しての戰爭には骨が折れて、餘り花々しい成績は收め得ないが、地道に發達して來た會社である。當社は明治四十年に旣設の事業を買つて出たので、資本金は二百五十萬圓の拂込濟である。キリンビール卽明治屋と云ふ譯で、同店主の米井氏が社長であり、專務であり、兼ねて販

賣掛でもあるやうな次第であるが、重役は何れも現代實業家のチヤキ〳〵近藤廉平氏なども顔を出して居る位で、經營の方針が着實である爲めか既に難關を突破して、一方製品の聲も高く、從つて收入も增加して、四十二年には六分に減じた配當も七分となり、七分五厘となり、大正二年の上半期には八分となづて、引續き八分を維持して居る。

加富登麥酒株式會社

最初から年寄臭い會社である。壯年時代が來ない中に老境に入つたやうな會社である。創立は明治二十九年の九月で、年から云つたら大日本麥酒に次ぐの古參であるが、成績から云ふなら一寸丈競べは出來ない。三十八年の下半期から四十二年上半期迄の八分配當が峠で、七分となり五分となり、更に大正三年の下半期からは利益繰越の無配當になつて了つた。併し此の無配當は工場の建設で固定資本が增した結果であるから、今後營業政策さへうまく行けば相當の配當は出來ぬ譯もあるまい。資本金は三百萬圓の内拂込が二百四十九萬圓、五十圓拂込濟の舊株が九千株、四十圓拂込の新株が五萬一千株である。

東洋捕鯨株式會社

此の社の生ひ立ちを洗つて見ると、其の初め大日本捕鯨、東洋漁業、長崎捕鯨、帝國水產の四社が合同し、更に東洋捕鯨を買收して、明治四十二年二月に設立されたものである。最初の資本金は七百萬圓、拂込が二百十萬圓、本邦水產界の覇王を以て任ずると云ふ有樣で、當時は一割五分の好配當であつた。所が根が水商賣であるから營業の成績がキチンと一定しない。時には無配當の場合もあつたが、大體に於て一割の配當を續けて、近くは一割二分であつた。所で會社の内情を聞くに、最早既に諸種の設備も完成して、今後新たに資金を必要とする場合もなさゝうだとあつて、昨年資本金を當初の三分の一卽ち二百三十三萬に減じ、内拂込二百九萬七千圓、額面五十圓の四十五圓拂込、四萬六千六百株としたのである。昨年（大正四年）下半期の純益金は四十四萬千七百圓で、之れに前期繰越六萬九千五百圓を加へたる計五十三萬千三百餘圓の内、船價償却

が一萬圓、法定積立金が一萬七千圓、別途積立金が五千圓、配當は前期同樣一割二分、後期繰越が六萬二千圓と云ふ考課狀である。

日本製粉株式會社

當社は製粉會社の元祖であつて、明治二十九年十月の創立てふ古い歴史を有して居る。現在の資本金は百五十五萬圓の内拂込が百二十六萬五千圓で、額面五十圓拂込の舊株が六千株、三十五圓拂込の第一新株が一萬四千株、同じく三十五圓拂込の第二新株が五千株、五十圓拂込濟の第三新株が六千株と云ふ込み入つた株券になつて居る。元來製粉事業なるものは賣捌に就ては面倒な掛引を必要とし、其の經營に骨の折れる事は並大抵でないのであるが、社長の前山久吉氏が亦人並外れた腕利きとあつて、創立十年後の三十八九年には立派に發展して二割六分てふ好配當に財界を驚かしたのであつた。所が神の作りしてふ法則は、一年中をブツ通して陽氣な春で浮かれることを許さない。好景氣の次ぎに來つた所のものは新會社の續出、生産の過剰、經營の困難なんど、兎角に厭な事のみ多く、ドドの詰りは新會社を買收して無謀の競爭を避くるの一段となり、四十年の十二月には明治製粉を、四十二年の九月には帝國製粉を併合して此の方、前山社長一流の手腕を以てしても再び二割六分など云ふ好配當を夢みることは出來なかつた。併し尙且つ一割二分を持續して株式市價も五十圓の拂込が七十二三圓に伸して居るのは流石にエライ。

日清製粉株式會社

明治四十年三月の設立で、日露戰後の企業熱旺盛時代の産物である。當社の創業當時が如何に困難であつたかを證明せんとするには、當社と相前後して創立された製粉會社の名前を列記すれば足りる。即ち本社と相前後して産聲をあげたものには大日本製粉がある。帝國製紛がある。東亞製粉がある。明治製粉がある。更に關西にあつては朝日、日本精米、及び增田の三社がある。而して是等の會社が各〻馬力をかけて生産に從事したのであるから、忽ちにして行き詰つて生産過剰、經營困難となつたのも無理ではない。所が當社は斯うした競爭

の渦中に投ぜられながら、夙に成功の彼岸に泳ぎ着いて、四十一年の一月には館林製粉を合併し、四十三年三月には大日本製粉を併呑し、其の度毎に世帶も大きくなつて、本邦製粉界のオーソリチーたる日本製紛及び東亞製粉と幷び稱せらるに到つたのは大成功であつた。現在の資本金は百七十萬圓の內拂込が百二十萬八千圓、五十圓拂込濟の舊株が千二百株、三十五圓拂込の新株が三萬二千八百株、配當は年一割である。

東京精米株式會社

僅かに五十萬圓の小會社だからとて小馬鹿にしては可けない。其の拂込に到つては更に減じて十七萬五千圓に過ぎないが、會社の實質に至つては一點批難す可きものなく、全く手堅い會社である。設立は明治二十九年の十一月で、營業の目的はなどゝ詳しく說明するの手數を省略して、株式會社の米屋さんと云つた方が判り易い。配當は開業以來ズット一割で、一時苦しい時代もないではなかつたが忽ちに回復して今日亦年一割の配當である。

大日本人造肥料株式會社

斯界の橫綱格である。他にも同じやうな會社がないでもないが此の會社に比較しては相撲にならぬ。明治二十二年二月の創立であつて人間ならば先づ相當の年輩、資本金は千二百五十萬圓で內拂込が八百四十三萬七千五百圓、株數は舊株額面五十圓拂込濟が十二萬五千株、新株十七圓五十錢拂込が十二萬五千株、併せて二十五萬株てふ大會社であるが、其の株主なるものは多くは地方の有力なる肥料商か、若しくは豪農である上に、不動貯金の一萬何千株てふ大株主のあるが爲めに浮動株は手薄である。元は東京人造肥料と稱して資本金二十五萬圓の小會社であつて、創立後四五年間は每度缺損續きであつた所へ、俗に云ふ泣きつ面に何とやら、明治二十六年には祝融子に見舞はれて工場の大半は烏有に歸し、廿八年には關西に同業者が現はれて競爭に血道を上げるなど、誠に幸運の神に見棄てられた形であつたが、日露戰後需要の激增に依つて俄か分限の格となり、三十八年の上半期までは二割の好配當に株主もホッと息を入れる。

斯くて四十一年上半期には資本金も三百萬圓となり、同年六月北海道人造及び帝國肥料を併合して更に四百萬圓となり、四十二年の上半期には六百二十五萬圓、大正二年下半期には千二百五十萬圓と云ふ具合に資金は益々充實して、偖て之れからが大活躍と云ふ所へ財界の不況、米價の暴落、地方農民の施肥手控へとなつて、コ、一兩年は業績も甚だしく振はないが、而も八分の配當で百餘萬圓の積立金を擁して居る。加ふるに昨秋來唱へられつゝある人肥界の景氣回復なる言葉も、今春（大正五年）より愈々實現さるゝ樣子であるから、今期からは噂の通り配當を一割に增加する事が出來るであらうとの期待から、昨今同株は兎角に硬勢を持して居る。

日本窒素肥料株式會社

歐洲動亂の好影響を受けて株式市場の花役株となつたものゝ一つである。設立は明治三十九年の一月、資本金は四百萬圓の内拂込が三百八十萬圓、舊株五十圓拂込濟が四萬株、新株四十五圓拂込が四萬株となる。炭化石灰、石灰窒素肥料及び硫酸アンモニヤの製造販賣と電燈電力の供給とを兼營して居る。設立以來順調に伸して行つて、僅かに一二回八分の配當であつた丈けで、常に一割の配當を持續して來た矢先、歐洲動亂と來て俄に硫安の需要が激增する、配當は二分增しとなり更に三分增しとなつて、昨年下半期には一割五分となつた。試みに大正四年下半期の營業成績を見るに、其の利益金は九十萬四千圓の巨額に上り、更に其の利益分配法は如何と云ふに、先づ財產銷却金として五十五萬圓てふ巨額を控除して新なるレコードを作り、準備積立金は前期同樣三萬五千五百圓、役員賞與金は一萬圓を增して三萬五千四百圓、株主配當が一割五分で二十六萬八千四百圓、後期繰越が六萬七千圓である。而も輸入の復活せぬ限り硫安の市價の低落せざるは勿論、我國に於ける硫安の需要は年々增加するのであるから、社運は隆々伸して行くの一方である。

日本ペイント製造株式會社

海軍收賄問題では重役が引つ張られたりして、聊か醜い噂を孕んだこともあつ

たが、洗つて見れば大した蟠りはなく、テもなく鳧が附いたのは同社に取つて勿怪の幸ひであつた。此の社の創立は明治三十一年の一月、資本金は百五十萬圓の内拂込が百十萬圓、五十圓拂込濟の舊株が一萬株で、三十圓拂込の新株が二萬株、株主配當は少い時でも年一割、少し景氣が出た際には一割六分もあつたが、レコードが一割二分で、平常でさへ立派な會社であるのに、更に歐洲動亂勃發以來はペイントの需要が激增して、同社の工場などはテン手古舞を演ずるの好況に、利に敏い人達が他にも似寄りの會社を起して見た樣子であるが、さう甘くは問屋で卸してくれぬものと見え、現在は此の社の獨占と云つた形勢にあつて、海軍省を手始めに其他の諸官署、さては民間の大會社も大體に於て此の社でなくてはならぬ程の信用に、當分は先づ天下泰平、確實な投資株として正札を貼るに聊かの躊躇も要らぬ。

日本化學工業株式會社

明治四十二年六月の創立と云ふ形式になつて居るが、其の事業はズッと以前からあつたので、同年に其の事業を繼承して會社組織とした迄である。資本金は三百萬圓で内拂込が百五十七萬五千圓、株は甲乙丙丁の四種に別れて甲乙の兩種が額面五十圓拂込濟で計一萬三千株、丙が額面五十圓の内二十五圓拂込で其の株數は二萬七千株、丁が額面五十圓の十二圓五十錢拂込で二萬株と云ふ事になつて居る。而して其の製品は沃度劑、硝石、曹達、鹽酸、硫酸加里と云つた風なもので、兎角素人には受けの能くない事業であるが爲めに、歐洲動亂勃發前までは株式市場に於てもテンで顧みられない方であつたが、歐洲が兵燹の巷と化して以來獨逸品の輸入は杜絶する。加之、時局の影響で製品は俄に需要を增加する會社は不眠不休の大活動を始める。茲に思ひ設けぬ增配てふ福の神が舞ひ込んで、俄に市場の人氣株になり濟ますなどは飛んだ儲けものと云はざるを得ない。今期の配當も前期同樣先づ二割五分と見て置けば間違ひあるまい。ダガ元々同唯だ戰後も此の調子でトン〳〵拍子に行くか怎うかは疑問である。社の製品たる醫療用藥品、工業用及び肥料藥品の需要增加は、歐洲動亂の爲めに輸入減退が一の原因を爲したるには相違ないが、此の種の製品は年々需要を

增加するの趨勢にあつて、歐洲動亂を機會に化學工業熱は大いに勃興せんとしつゝあれば、此の機運より見て同社の前途には洋々たる希望の輝きつゝあるを認めざるを得ない。

品川白煉瓦株式會社

株式市場では餘りチヤホヤされない株であるが、會社の内容は案外に健實である。明治三十六年六月の創立と云ふ事になつては居るが、明治八年に創始された業務の引繼ぎを受けて三十六年に會社組織にしたのであるから、事業の上から見るならば大分長い經驗を積んで居る譯である。當初の資本金は二十五萬圓であつたが、漸次事業の擴張と共に資本も太つて行つて、三十八年の上半期には五十萬圓となり、其の翌年の下半期には百萬圓となり、大正二年の上半期に至つて現在の二百萬圓となつたのである。内拂込が百二十五萬圓で、株數は舊株五十圓拂込濟が二萬株、新株十二圓五十錢拂込が二萬株である。生れてから此の方格別波瀾ある生涯を送つた譯でもなく、唯だ順當に育つて行つて一割の配當率を維持して居る。どうした譯か煉瓦事業と云へば兎角に面白い成績を擧げ難い樣子で、何處の會社も不振續きの中に、獨り此の會社のみが一割の配當を維持して來たのは、主として重役の努力に依るとしても、一には又白煉瓦、裝飾煉瓦など一寸目先の變つたものに手を染めた爲めであらう。聞けば近來盛んに海外輸出を企てゝ既に相當の成果を收めたと云ふから、同社が工業界に頭角を露はすの日も遠くはあるまい。

日本セメント株式會社

意があつて貶す譯ではないがセメント株許りは全く投資の目的物にはならない。間違つて株を持つて見ても、賣り度い時に賣れるでもなく、銀行で擔保に取つて呉れるでもない。大體は無配當と市の相場が決定して居るのであるが、マナ中では日本セメントなどが上々の方で、配當も五分で、株式の市價は二十五圓拂込の親が二十一二圓、二十圓拂込の新が二十圓とあつては大いに滿足して可なりだ。社の資本金は百十萬圓の内拂込が百三萬圓總株數四萬四千株である。

日本銀行

單に日本銀行株とさへ云へば聊かの說明も註釋も必要とせずに、大手を振つて大道を濶步し得る株である。現時の資本金は六千萬圓の內拂込が三千七百五十萬圓、株數は一株額面二百圓全額拂込濟の親が十五萬株、同じく額面二百圓の內五十圓拂込の新が十五萬株、併せて三十萬株である。配當は一割二分、積立金は三千餘萬圓で殆んど拂込資本金の額に等しい。株式市價は二百圓拂込の親が六百圓臺を往來して、五十圓拂込の新が三百二十圓ドコを上下して居る。試みに算盤を取つて其の利廻りを計算して見ると、評判丈け馬鹿によくつて割の惡い事は公債よりも甚しいが、利廻りなどには頓着なしに此の株さへ持つて居れば家の格式でも高まるかのやうな、一種の名譽心も手傳つて買ひ向ふ人が尠くないので株式の市價は常に高い。抑も當行は明治十五年に資本金一千萬圓を以て設立されたもので、政府からは特殊の權利を與へられ、兌換券を發行し國庫金の出納を司つて居ることは人の知る如く、誠に帝國に於ける唯だ一つ

の最高金融機關である。明治二十年には從來の資本金を倍加して二千萬圓となし、日清戰後には清國から受取つた償金を以て幣制の改革を斷行し、銀本位から金本位に移り變るに際して、日銀の資本も亦三千萬圓に增大された。時恰も我が國際的地位の向上期に在つて、吾が國勢は駸々乎として長足の進步を示しつゝある。卽ち我が經濟社會の進步の顯著なるものあるに連れて日銀の基礎も漸く固く、三十七八年の日露戰役に際しては能く帝國政府の財政を援護し、六億八千萬圓の內債と一億七千萬磅の外債とを募集するに方つて、能く其の任務を完ふし、越えて四十三年には一躍資本金を倍加し、六千萬圓の內拂込三千七百五十萬圓となつて今日に到つたのである。

投機資料

會社の內幕

終

大正五年四月廿一日印刷
大正五年四月廿四日發行

定價金壹圓五拾錢

編輯兼發行人　東京市神田區表神保町十番地　高柳淳之助
印刷人　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　淺野榮作
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

著作權所有

發行所　東京神田表神保町十番　振替東京二八一九七番　富强世界社

成功致富の近道

本社々長高柳氏は無一文より僅九ケ年間に拾餘萬の富を作りし人也、世には株式相場にて何十萬何百萬の富を作る人あれど忽ちにして失敗するもの多し、本社々長の利益は彼等に比して甚少けれども資産は年々に増殖しつゝあり、これ高柳式相場必勝法は其利益比較的少けれども毫も損失の恐れなき何よりの證據なり。

株式相場講義錄

少資本を以て株式相場をなし堅實なる富を作らんとせば本社發行の講義錄を讀め無經驗の者にもよく分り經驗ある人も意外の眞理を發見すべし資金四五十圓地方田舍に居ながらも出來、農工商官公吏軍人教員等も差支なし會員中已に成功者多く謝狀續々來る、將に株界活躍の兆ありハガキにて申込次第會則を進呈す

東京神田表神保町、富强世界社内

株式相場研究會

電話本局(長)六八五番
振替東京二八一九七番

株式專門『富强世界』の發行

株界の形勢は時々刻々に變更しつゝあり、故に最近の市場の形勢を報導すべく株式專門「富强世界」を發行す、定價と內容左の如し。

一、毎月二回發行(五日及二十日)定價壹册拾錢半年分金壹圓拾錢一年分金貳圓送料本社持

二、記事は株式商況、株式市場縱橫記、各會社銀行の內情評論、名士の株式前途觀、一般經濟記事

三、期米相場の商況、形勢

四、高柳社長の致富の研究、株式賣買の實際、及び毎月の前途觀

五、株式期米相場に關する質問應答

特に高柳社長は今何株を買ひたりとか何株の賣注文を發したりとか乃至は其實地掛引より其決算に至るまで正直に誌上に之を發表するを以て世の思惑者の好參考となるべく質問應答は六號字を以て力めて多數の應答を掲載すべし、故に本誌の記事は眞に一字千金の價値を生じ貳拾圓參拾圓を投じて觀測屋や通信社の豫言を聞くよりも尙よき參考となるべし、論より證據本誌の株式前途觀はこれまで神の如く一々的中し、未だ一回もはづれたる事なし、故に本誌の讀者は皆資金相當の大利を得つゝあり至急誌代一年分貳圓を御送金の上購讀御申込あらん事を。

(大正五年四月第四卷八號發行)

◎富强世界社友規定

一、本誌の趣旨を贊し誌代一年分金貳圓を本社へ前納者を社友とす

二、社友には本社經營事業に關し總て特別の便宜を與ふ

三、社友は本社法律顧問たる辯護士に就き特別低廉の謝儀を以て法律事務の手續を依頼する事を得

四、社友が本社相談部に質問する時は謝儀を半減す

五、地方にある社友の便宜を計り東京市內に於ける確實なる米株仲買店を紹介すべし

六、社友には本社發賣の圖書を一割引とす

七、社友が實地視察等の爲めに上京せし時は有益なる助言注意を與へ出來得るだけの便宜を計るべし

八、社友は本社に對する書信、又は名刺等には必ず社友の肩書を付せられたし

●心配なく相場が出來る●

富强世界社——電通部開始

●本社の社友や讀者から「資金を何圓送るから社長に相場をやつて貰ひたい」と依頼せらるゝ方が非常に多い。然るに他人の金を預つて株式賣買をすると取引所法違反となり多大の罰金を科せらるゝにより悉くこれを謝絶せられてゐる。

●然るに初心の者や、地方に居住せらるゝ人などは會社の内情も、市場の形勢も、之を調査する便宜がないので、實地に相場をして見ようと思つても大に迷つてゐるだらうと思ふ、故に今回「電通部」といふものを設けて、高柳社長は今何株をイクラで買つたとか、又何株をイクラで賣つたとかいふ事を即時電報で報知する事にした。

●會員は其電報を參考として、其の通りに株式仲買店へ賣買を命ずると、高柳社長に依頼して賣買したのと殆んど同樣である、故に心配なしに株式相場をする事が出來る、萬一其の通り實行して損をした場合には本社々長も亦同樣な損をするのであるから、時に見込違ひがあつたり、突發的材料の爲めに、相場に激變があつても其は御許しを願ひたい。

●といつても、苟も社長自ら相場をする以上は充分の見込があつて始めるので決して無責任な發信はせぬツモリである、隨つて電通部開始以來會員は皆多大の利益を得てゐるのである、本社々長を信ずるの士は至急御入會あらん事を、規定下記の通り。

●富强世界社電通部規定

一、此電通部に加入せらるゝ方は必ず本社の株式講義錄を精讀せられし者に限る。

二、證據金壹千圓を有し、萬一の場合には尙五百圓を出資し得らるゝ者を甲種會員とす。

三、證據金貳百圓を有し、萬一の場合には尙百圓を出資し得らるゝ者を乙種會員とす。

四、甲種會員にはすべての株の賣買を通知すれど、乙種會員には激變ある株は危險なれば堅實なる株の賣買のみを通知す。

五、會員は直接仲買店と取引すべし、仲買店は望みにより紹介すべきも本社は金錢の受拂を取次せず。

六、本社々長が賣買せし時は其株名、株價を即時電報にて之を通知す。

七、電報は暗號による、暗號表は入會者に之を進呈す。

八、會費は左の通りとす。

乙種（四回報知 電報料共）
東京市内 金三圓
其他府縣 金三圓五十錢
臺灣樺太 朝鮮滿洲 金四圓

甲種（四回報知 電報料共）
金六圓
金七圓
金八圓

電報配達局より二里以上を隔つる時は別に配達料一回二十錢增

九、電報は一ヶ月凡四回とす、但見込立たず賣買せざる時は一ヶ月四回以下とする事あるべし。此場合には會費は次の月に持越し規定の通り四回打電する迄は會費前金切とならざるものとす。

十、會費は振替貯金により東京二八一九七番富强世界社に拂込むべし、但し必ず「電通部會費」と明記を要す。

十一、會費四回分は略一ヶ月分の見込に付八回分又は十二回分一時に前納し置く事を得、但割引なし。

十二、入會者は住所氏名に讀み方のフリカナを付け置かれたし。

327
826

7

終